

# 藤原京跡Ⅲ、黒田池遺跡

—左京一・二条六・七坊—

2013年3月

奈良県橿原市教育委員会

## 序

ここに藤原京跡Ⅲ－左京一・二条六・七坊一、黒田池遺跡の発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告 第7冊』として刊行します。

本書は、奈良県橿原市膳夫町・出垣内町において計画された店舗の建設工事に伴って当教育委員会が実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

調査地は橿原市の東端部、桜井市との市境に接している黒田池の西隣に位置しています。橿原市東部から桜井市西部、明日香村北部にかけての地域には、日本で最初の本格的な都城「藤原京」が広がっています。調査地はその藤原京の東半部中央付近に位置しています。また、過去に調査地東隣の黒田池からは、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が発見されており、付近一帯は黒田池遺跡として遺跡地図に登録されています。

今回の調査では、掘立柱建物や井戸などの藤原京の宅地に関わる遺構や、古く縄文時代にさかのぼる遺物などが発見されました。この地域の歴史を知る上で貴重な成果を得ることができたと言えます。

最後になりましたが、現地の発掘調査の実施や本書の刊行にあたって御協力いただいた関係諸氏ならび諸機関に厚く御礼申し上げると共に、本書が多くの方々に活用され、遺跡の重要性を周知する機縁となることを願います。

平成25年3月26日

橿原市教育委員会  
教育長 吉本重男

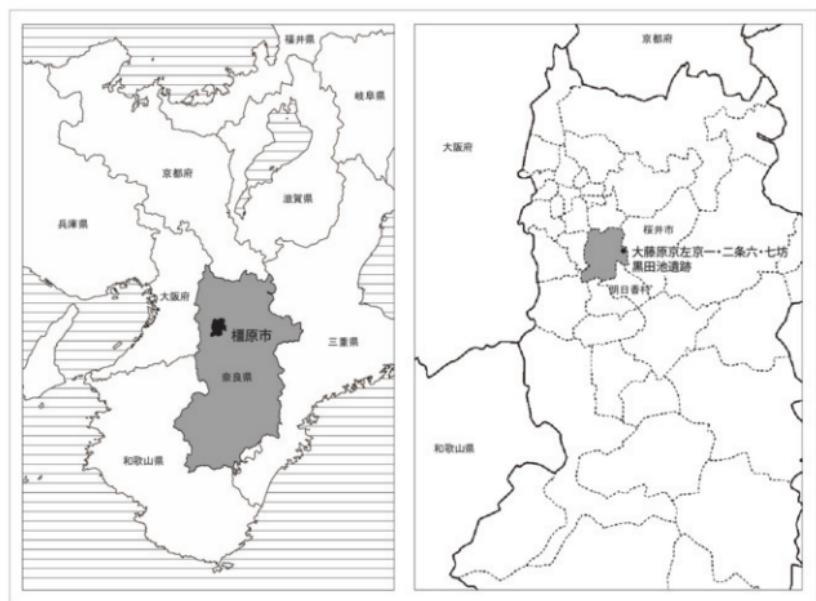


図1 調査地位置図

## 例　　言

- 1 本書は、大藤原京左京一・二条六・七坊、黒田池遺跡の発掘調査報告書である。調査地は奈良県橿原市膳夫町および出塙内町に所在する。
- 2 発掘調査は、株式会社 廣基 代表取締役社長 廣岡 聖司 氏より店舗建設に伴って提出された埋蔵文化財発掘届出にもとづき、奈良県教育委員会の指導のもと橿原市教育委員会が実施した。
- 3 現地調査期間は平成 24（2012）年 4 月 16 日～同年 6 月 1 日である。また、遺物整理・報告書作成には平成 24 年度を充てた。
- 4 現地調査および遺物整理時の体制は、橿原市教育委員会 文化財課長 竹田正則、課長補佐濱口和弘・中川明彦、統括調整員 平岩欣太、係長 米田一、主査 石坂泰士である。現地調査は石坂が担当した。
- 5 現地調査および整理・報告書作成にかかる費用は株式会社 廣基が負担された。記して感謝申し上げたい。
- 6 現地調査および遺物整理を実施するにあたって、地元各位の多大な御協力を賜った。記して感謝申し上げたい。
- 7 出土遺物をはじめ調査記録は、橿原市教育委員会で保管している。
- 8 本書所収の写真のうち、現場調査写真は現地調査担当者が撮影を行った。遺物写真は有限会社阿南写真工房が撮影を行った。
- 9 本書の編集および執筆は石坂が担当した。

## 凡　　例

- 1 本書で示す方位は座標北を使用した。座標値は世界測地系（平面直角座標第VI系）に基づく。
- 2 図版に掲載している遺物の縮尺率は任意である。
- 3 土層名における色調は『新版標準土色帖 24 版』（小山正忠・竹原秀雄 編著、日本色研事業株式会社 発行）を使用した。
- 4 遺構・遺物の図面縮尺は各図に示した。遺構断面図の標高値はいずれもメートル表記である。
- 5 遺物実測図の番号は本書全体の通し番号で示した。図版の遺物番号もこれに合わせている。
- 6 土器の実測図については、須恵器は断面を黒塗りで、縄文土器・土師器は断面を白抜きで、それぞれ表現している。
- 7 遺物説明文中の各部径は直径である。
- 8 調査地は岸俊男氏による復元藤原京城の外側、いわゆる大藤原京城に位置する。橿原市教育委員会では、大藤原京城について大藤原京跡という遺跡名称を用いているが、発掘調査報告書については大藤原京城も含めて藤原京跡としてシリーズ刊行を行っている。なお、本文中および図中では遺跡名の表現として一部に大藤原京という表現を用いている。

## 目 次

序	1
例言	iii
凡例	iii
目次	iv
挿図目次	v
図版目次	vi
第Ⅰ章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯と調査・整理体制	1
第2節 調査の経過	2
第3節 地理的・歴史的環境	3
第Ⅱ章 1トレンチの調査	
第1節 層序	5
第2節 遺構	8
第3節 遺物	16
第Ⅲ章 2トレンチの調査	
第1節 層序	21
第2節 遺構	23
第3節 遺物	30
第Ⅳ章 総括	36
報告書抄録	38

図版

## 挿 図 目 次

図 1 調査地位置図	ii
図 2 調査地周辺の遺跡 (S = 1/25,000)	4
図 3 調査地周辺図 (S = 1/5,000)	4
図 4 1 トレンチ調査区東壁 土層断面 (S = 1/50)	6
図 5 1 トレンチ調査区南壁 土層断面 (S = 1/50)	7
図 6 1 トレンチ上層遺構 完掘状況平面図 (S = 1/150)	9
図 7 1 トレンチ下層遺構 平面図 (S = 1/150)	10
図 8 1 トレンチ 1044SE 平面・断面図 (S = 1/40)	11
図 9 1 トレンチ 1047SK 平面・断面図 (S = 1/20)	12
図 10 1 トレンチ 1099・1100SK 平面・断面図 (S = 1/20)	13
図 11 1 トレンチ SB・SD・SK 土層断面 (S = 1/40)	14
図 12 1 トレンチ SP 土層断面 (S = 1/40)	15
図 13 1 トレンチ 1044SE 出土 須恵器・土師器 (S = 1/4)	16
図 14 1 トレンチ 1044SE 出土 繩文土器 (S = 1/4)	18
図 15 1 トレンチ 1044SE 出土 石器 (S = 1/4)	18
図 16 1 トレンチ 1045SD 出土 須恵器・土師器・繩文土器 (S = 1/4)	19
図 17 1 トレンチ 1047SK・1050SK・1100SK 出土 土師器 (S = 1/4)	19
図 18 1 トレンチ 耕作層出土 須恵器 (S = 1/4)	20
図 19 1 トレンチ 耕作層出土 石礫 (S = 1/1)	20
図 20 1 トレンチ 野井戸出土 土師器 (S = 1/4)	20
図 21 2 トレンチ 調査区南壁 土層断面 (S = 1/50)	22
図 22 2 トレンチ 調査区 東・西壁 土層断面 (S = 1/50)	23
図 23 2 トレンチ 上層遺構 完掘状況平面図 (S = 1/100)	24
図 24 2 トレンチ 中・下層遺構 平面図 (S = 1/100)	26
図 25 2 トレンチ 2070SK 平面・断面図 (S = 1/20)	27
図 26 2 トレンチ SB・SA・SK・SD・SP 土層断面 (S = 1/40)	28
図 27 2 トレンチ SP 土層断面 (S = 1/40)	29
図 28 2 トレンチ 2022SD 出土 須恵器・土師器 (S = 1/4)	31
図 29 2 トレンチ 2022SD 出土 磯石 (S = 1/2)	31
図 30 2 トレンチ 2037SP・2042SP・2044SP・2053SK 出土 須恵器・土師器 (S = 1/4)	32
図 31 2 トレンチ 2021SX 出土 須恵器・土師器 (S = 1/4)	33
図 32 2 トレンチ 2070SK 出土 繩文土器 (S = 1/4)	34
図 33 2 トレンチ 2070SK 出土 石器 (S = 1/4)	34
図 34 2 トレンチ 耕作層出土 須恵器・土師器 (S = 1/4)	35

## 図 版 目 次

図版1上	1 トレンチ 上層遺構検出状況（南東から）	39
図版1下	1 トレンチ 上層遺構検出状況（南西から）	39
図版2上	1 トレンチ 下層遺構検出状況（南東から）	40
図版2下	1 トレンチ 下層遺構検出状況（南西から）	40
図版3上	1 トレンチ 完振状況（南東から）	41
図版3下	1 トレンチ 完振状況（南西から）	41
図版4上	1 トレンチ 1044SE・1045SD・1047SK 検出状況（南から）	42
図版4下	1 トレンチ 1044SE 土層断面（北東から）	42
図版5上	1 トレンチ 1044SE 木材検出状況（北東から）	43
図版5下	1 トレンチ 1044SE 完振状況（東から）	43
図版6左上	1 トレンチ 1044SE 土層断面（北東から）	44
図版6右上	1 トレンチ 1047SK 土層断面（東から）	44
図版6左二段目	1 トレンチ 1045SD 完振状況（北西から）	44
図版6右二段目	1 トレンチ 1045SD 土層断面（西から）	44
図版6左三段目	1 トレンチ 1099・1100SK 検出状況（北西から）	44
図版6右三段目	1 トレンチ 1100SK 遺物出土状況（北西から）	44
図版6左下	1 トレンチ 1103SB 検出状況（南東から）	44
図版6右下	1 トレンチ 1103SB 完振状況（南東から）	44
図版7左上	2 トレンチ 上層遺構検出状況（西から）	45
図版7右上	2 トレンチ 上層遺構検出状況（東から）	45
図版7左下	2 トレンチ 中層遺構検出状況（西から）	45
図版7右下	2 トレンチ 中層遺構検出状況（東から）	45
図版8	2 トレンチ 中層遺構完振状況（西から）	46
図版9	2 トレンチ 中層遺構完振状況（東から）	47
図版10上	2 トレンチ 2022SD 検出状況（北から）	48
図版10下	2 トレンチ 2022SD 完振状況（北から）	48
図版11上	2 トレンチ 2021SX 検出状況（北から）	49
図版11左中	2 トレンチ 2021SX 遺物出土状況（北西から）	49
図版11右中	2 トレンチ 2022SD 土層断面（北から）	49
図版11左下	2 トレンチ 2025SP 土層断面（南から）	49
図版11右下	2 トレンチ 2070SK 検出状況（北西から）	49
図版12上	1 トレンチ 1044SE 出土 須恵器・土師器	50
図版12下	1 トレンチ 1044SE・1045SD 出土 織文土器	50
図版13左上	1 トレンチ 1047SK 出土 土師器	51
図版13右上	1 トレンチ 1044SE 出土 須恵器	51
図版13左中	1 トレンチ 1100SK 出土 土師器	51
図版13右中	2 トレンチ 2022SD 出土 砥石	51
図版13下	2 トレンチ 2022SD 出土 須恵器・土師器	51
図版14上	2 トレンチ 2021SX 出土 須恵器・土師器	52
図版14下	2 トレンチ 2070SK 出土 織文土器・石器	52
図版15上	2 トレンチ 2022SD 出土 須恵器・土師器	53
図版15下	2 トレンチ 2021SX 出土 須恵器・土師器	53

# 第Ⅰ章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯と調査・整理体制

今回の調査は、平成23（2011）年2月14日付で株式会社 廣基 代表取締役社長 廣岡 聖司 氏から提出された埋蔵文化財発掘届出を契機とするものである。工事内容は鉄骨造の店舗建設である。建物予定地点は敷地の北側に位置する。

申請地は日本最初の本格的都城である藤原京、および縄文時代から古墳時代の集落跡である黒田池遺跡の範囲に含まれている。調査地の周辺ではこれらの遺跡に関わる遺構・遺物の存在が確認されている。

この届出を受けて、平成23（2011）年2月17日に遺構の有無確認、および工事による遺構面への影響を確認するための試掘調査を檜原市教育委員会が実施した。試掘調査区は建物予定地点の北西隅付近に1ヶ所、同南東隅に2ヶ所、計3ヶ所に設定した。試掘調査面積は合計90m<sup>2</sup>である。

試掘調査の結果、すべての調査区において遺構が存在することを確認した。検出した遺構は中世以降の耕作溝とそれより古い時期の土坑・溝・ピットである。また、遺構埋土や耕作土中には古代を中心とする遺物が含まれることも確認した。部分的に近代以降の搅乱を受けている場所が存在するものの、建物予定地である調査地の北半帯に遺構が遺存していることが予想された。

試掘調査では遺構面上面の標高が現在の周辺地形と同様に、南東から北西に向かって低く傾斜していることも確認した。遺構面の標高は建物予定地の南東隅と北西隅を比較すると、南東隅のほうが約0.7m高くなっている。

当初の工事計画では、建物基礎工事の掘削が建物部分全体で遺構面にまで及んでいた。その後、試掘調査成果を受けて当教育委員会と事業者で協議を重ね、遺構保護のために建物位置の変更および建物基礎の掘削深度を浅くする設計の変更が行われることとなった。平成24（2012）年3月15日付で埋蔵文化財発掘届出の一部変更願いが提出された。

設計の変更により、建物範囲内の大部分の遺構が保護されることとなった。ただし建物の南東隅一帯については、遺構面の標高が高く、遺構保護に十分な保護層が確保できないため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。この範囲が本発掘調査の1トレンチにあたる。また、建物より北側、敷地の北西隅には大型浄化槽が埋設されることとなった。浄化槽設置時の掘削は遺構面より深くなるため、この部分についても発掘調査を行うこととなった。これが2トレンチにあたる。

このような経緯の後、当教育委員会と事業者とで発掘調査および整理作業に関する契約を締結した。

調査面積は1トレンチが255m<sup>2</sup>、2トレンチが110m<sup>2</sup>、合計365m<sup>2</sup>である。なお、1トレンチの南東部には建物南東隅に設定した試掘調査区が含まれている。また、2トレンチ北東部には、敷地北西隅に設定した試掘調査区の西半部分が含まれている。

当教育委員会では、調査年度を西暦で表し、その年度内に行われた発掘調査名称を年度－調査次数の形で示している。今回の調査に対しては樅教委2012－2次調査という番号を付与している。調査記録や出土遺物には、この番号を記して整理・保管している。

整理・報告書作成については現地調査終了後、当教育委員会が引き続き行った。作業には平成24年度を充て、樋原市文化財整理室にて作業を行った。

## 第2節 調査の経過

本発掘調査は平成24(2012)年4月16日から同年6月1日までの期間で実施、実動日数28日間を要した。調査の日々の記録は、以下の調査日誌抄録に掲げた。

4. 16(月)2トレンチから重機掘削開始。現地表から約0.9mの深さで遺構面。2トレンチ重機掘削9割終了。
4. 17(火)2トレンチ重機掘削終了。現代造成土内に多量の瓦礫が含まれており、調査区壁画の整形に苦労する。遺構検出作業。
4. 18(水)2トレンチ上層遺構検出写真撮影。1トレンチの重機掘削開始。現地表から約1.5mの深さで遺構面。現代造成土底面付近の高さに犬走りを設ける。
4. 19(木)1トレンチ重機掘削約6割終了。2トレンチ現代暗渠・耕作溝の掘削。
4. 20(金)雨天のため、作業なし。
4. 23(月)1トレンチ重機掘削約9割終了。調査区中央に現代の野井戸が存在することを確認。2トレンチ基準測量杭打設。
4. 24(火)1トレンチ重機掘削終了。上層遺構検出写真撮影。2トレンチ耕作溝の掘削。
4. 25(水)1トレンチ上層遺構検出写真撮影。2トレンチ作溝の掘削。
4. 26(木)雨天のため、作業なし。
4. 27(金)1トレンチ上層遺構掘削開始。1トレンチ基準測量杭打設。
5. 1(火)1トレンチ上層遺構掘削。
5. 2(水)雨天のため、作業なし。
5. 7(月)1トレンチ上層遺構掘削完了。写真撮影に向けての清掃。
5. 8(火)1トレンチ上層遺構完掘写真撮影。2トレンチ上層遺構完掘写真撮影に向けての清掃。
5. 9(水)2トレンチ上層遺構完掘写真撮影。耕作溝下に古代の遺構が存在する。
5. 10(木)2トレンチ遺構掘削。
5. 11(金)2トレンチ遺構掘削。遺構は藤原京期が主か。
5. 14(月)2トレンチ遺構掘削。2022SD検出写真撮影。
5. 15(火)雨天のため、作業なし。
5. 16(水)2トレンチ遺構掘削。2022SDから藤原京期遺物出土。
5. 17(木)2トレンチ古代の遺構掘削完了。1トレンチ遺構掘削。
5. 18(金)2トレンチ遺構完掘写真撮影。藤原京整地層の掘削。
5. 21(月)1トレンチ遺構掘削。1044SE北半掘削。2トレンチ上層遺構基盤層掘削。
5. 22(火)1トレンチ遺構掘削。1044SEの掘方・抜き取り穴を平面および断面で確認。
5. 23(水)1トレンチ遺構掘削。
5. 24(木)2トレンチ東端遺構面掘削。縄文時代と考えられる下層遺構を検出。
5. 25(金)2トレンチ下層遺構完掘、記録作成。2トレンチの調査は終了。
5. 28(月)1トレンチ清掃後、完掘写真撮影。
5. 29(火)1トレンチ完掘写真撮影。
5. 30(水)1トレンチ記録作業。2トレンチ重機埋め戻し終了。
5. 31(木)1トレンチ記録作業。1トレンチ重機埋め戻し開始。
6. 1(金)1トレンチ重機埋め戻し終了。全作業終了。

### 第3節 地理的・歴史的環境

今回の調査地は、橿原市の東端部中央に位置する出垣内町および膳夫町に所在する。調査地周辺では出垣内町と膳夫町の境界が複雑に入り組んでおり、調査地点は両町にまたがる形となっている。調査地から北北東に約250mの地点にはJR桜井線香久山駅が所在する。調査地の南辺は国道165号線に面しており、東は黒田池と接している。池より東は桜井市域である。黒田池は四周を一辺約100mの堤で囲った溜め池である。池が築かれた時期は明らかではない。調査地周辺は水田と宅地が混ざり合っており、近年、次第に宅地化が進行しつつある地域である。

橿原市は奈良盆地の南東部に位置している。市の南～南東部には龍門山地から派生する丘陵地が広がっており、北に向かって緩やかに下降する斜面地形を経て、北に肥沃な沖積地が広がる。調査地はその沖積地に位置している。調査地から南南西に約1kmの地点には名勝大和三山のひとつ、香具山が所在する。

調査地周辺の標高は、おおむね南東から北西方向に向かって低くなる。調査地から西に約150mの地点を流れる米川も、この近辺では南東から北西に流れている。調査地の現況の標高値は71.5～72.7mである。現代造成土の多寡により若干の起伏はあるものの、基本的には北西側が低くなっている。

調査地を内包する藤原京は694年から710年まで營まれた日本で最初の本格的都城である。現在確認されている藤原京の規模は東西約5.3km、南北約4.8kmである。現在の行政区域では橿原市東部、桜井市西部、高市郡明日香村北部にまたがっている。藤原京ではこれまでに多くの調査が行われ、様々な成果が得られている。

調査地は藤原京の条坊復元では大藤原京左京一・二条六・七坊にあたる。今回の申請地の中央付近に東六坊大路が、敷地北半部に一条大路がそれぞれ通ると想定される(図2)。1トレンチと2トレンチとの間は、東西に約36m、南北に約34m、直線距離にして約65m、離れている。東六坊大路・一条大路および両者の交差点は、ちょうど両調査区の間を通る形となっている。したがって1トレンチは左京二条七坊西北坪、2トレンチは左京一条六坊東南坪に位置することとなる。

調査地周辺では、店舗建設に伴う橿原市教育委員会の発掘調査で東四坊大路(中ツ道)・一条大路の交差点および東五坊坊間路・一条大路の交差点を確認している(橿教委1999-2次、2003-2次調査。図3)。東六坊大路については、これまでに明確な検出例は知られておらず、西側溝の可能性がある遺構の検出例があるのみである(橿教委2000-18次)。

また、調査地は縄文時代から古墳時代にかけての集落跡・遺物散布地である黒田池遺跡にも含まれている。調査地の東隣に所在する黒田池を中心にして東西約400m、南北約300mの範囲が黒田池遺跡である。黒田池遺跡における発掘調査は例が少ないが、古くに池の堤北辺中央付近で行われた調査では縄文時代後期以降の土器や石器、木製品が多く出土している(小島1965)。出土層位は池底面より下層の砂層である。

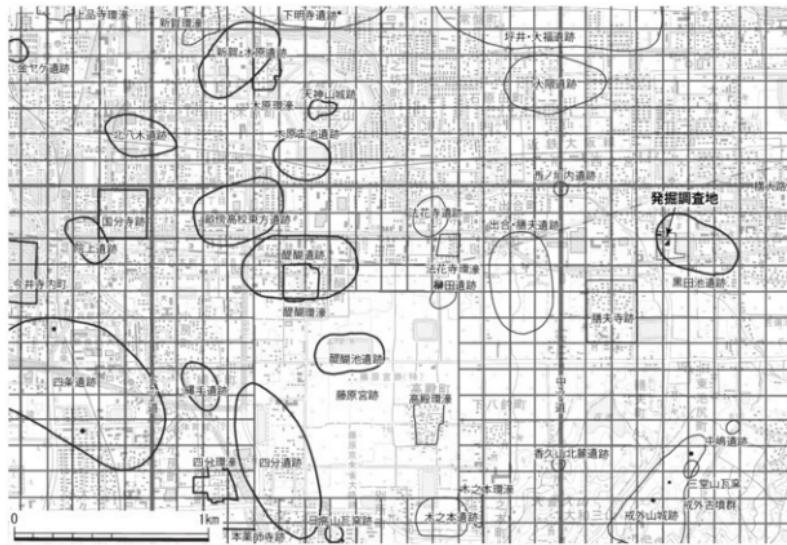


図2 調査地周辺の道路 ( $S = 1/25,000$ )。格子目は藤原京復元条坊

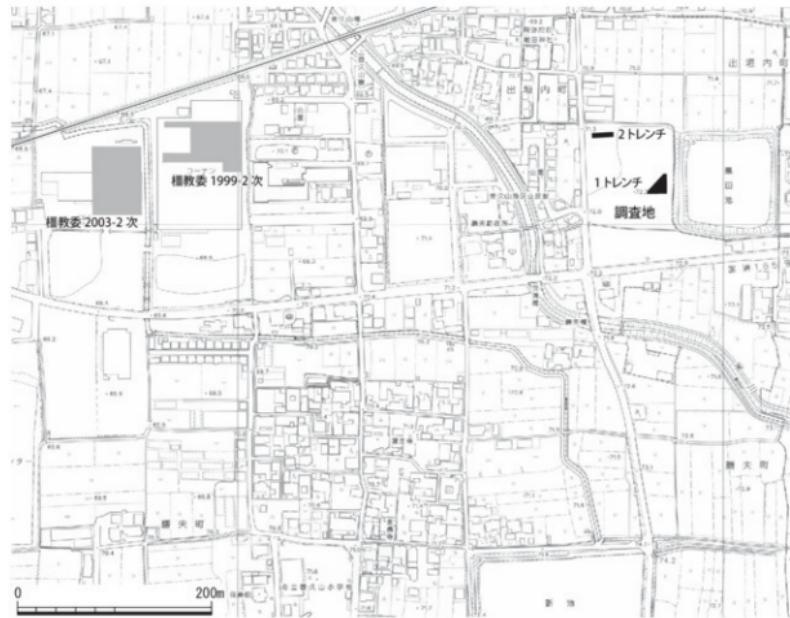


図3 調査地周辺図 ( $S = 1/5,000$ )

## 第Ⅱ章 1 トレンチの調査

### 第1節 層序

1 トレンチと 2 トレンチとでは基本的な層序が異なるため、それぞれの出土遺構・遺物とあわせて調査区ごとに報告を行うこととする。

1 トレンチの基本層序およびその詳細は以下のとおりである。

I 層：現代の造成土（1 層）

II 層：造成以前の耕作土（2 層）

III 層：床土。近世以降の耕作土（3 層）

IV 層：中世～近世の耕作土（4 ～ 18 層）

V 層：古代より前の河川堆積層。遺構基盤層（28 ～ 43 層）

VI 層：縄文時代の堆積土（調査区中央のみで確認。図 8 の 20 層）

VII 層：地山（図 8 の 21 層）

I ～ V 層の上層番号は図 4・5 を参照

I 層は調査地全体に広がる現代の造成土である。上面の標高は 72.4 ～ 72.7 m で、南東から北西に向かって低くなる。造成土の厚さは地点によって差異があり、1 トレンチ周辺では約 0.9 ～ 1.1 m を測る。地点によっては造成土内に多量の瓦礫などが含まれている。現代の瓦を投棄した擾乱坑なども存在するが、図 4 では I 層の細部は省略している。

II 層は造成以前の旧耕作土で、時期は現代である。上面の標高は 71.5 ～ 71.7 m である。造成の際に部分的に削平を受けているものの、概ね当初の上面を残している。

III 層は II 層の床土層にあたる近世以降の耕作土である。上面の標高は 71.3 ～ 71.5 m である。

IV 層は中世から近世にかけての耕作土である。いわゆる素掘り耕作溝もここに含まれる。上面の標高は 71.3 ～ 71.4 m である。主として褐灰色砂質土・にぶい黄色土からなる。IV 層は調査区の南半には面的に広がるが、北半では近世以降の耕作（II・III 層）によって削平され、耕作溝として部分的に残るのみである。

V 層は調査区全体に広がる古代より古い時期の堆積層で、1 トレンチの遺構基盤層である。浅黄色シルト・黄橙色微砂・灰褐色細砂などの砂質土層からなり、河川堆積層であると考えられる。V 層は遺物が出土していないため正確な時期は不明であるが、上面の遺構や VI 層の出土遺物から、縄文時代から古代までのいずれかの時期に堆積したと考えられる。上面の標高は 71.2 ～ 71.3 m である。厚さは調査区中央で約 1.4m を測る。V 層上面は調査区南半では比較的しまりが強いが、北半はやや軟弱である。

VI 層は縄文時代の堆積土である。VI・VII 層は、調査区中央に位置する現代野井戸および 1044SE を掘り下げた底面付近で存在を確認している。上面の標高は 69.8 m である。

VII 層は地山であると考えられる青黒色粘土層である。上面の標高は 69.6 m である。

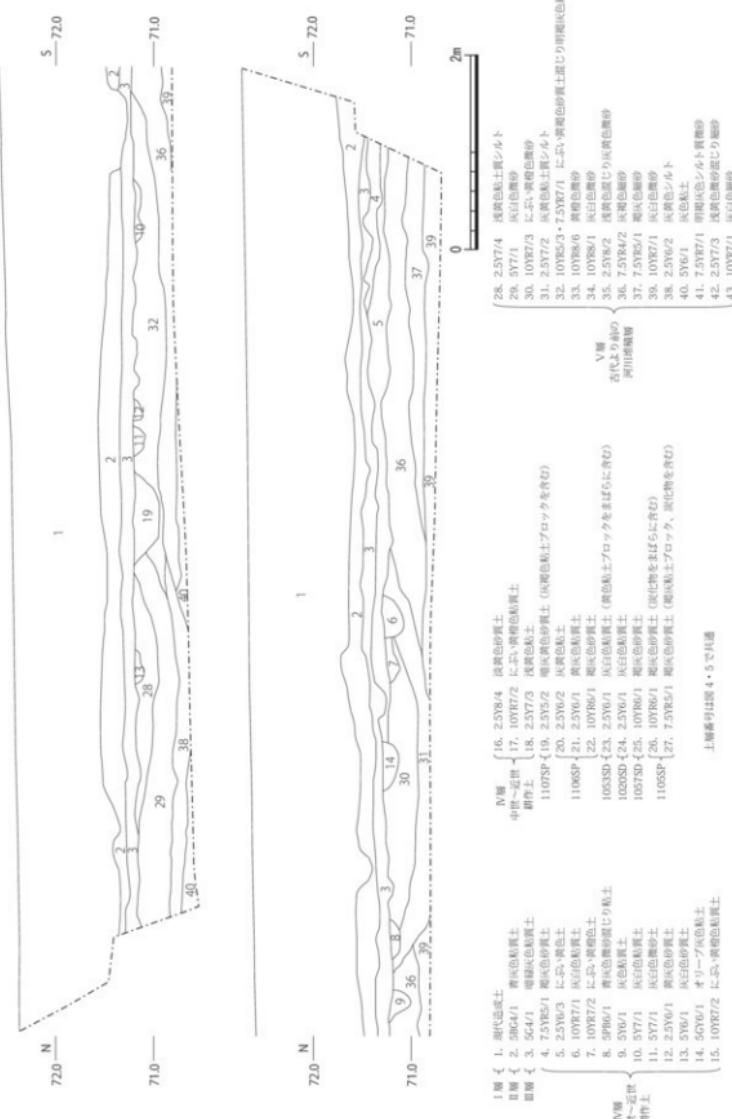


図4 1トレンチ調査区東壁 土層断面 (S = 1/50)

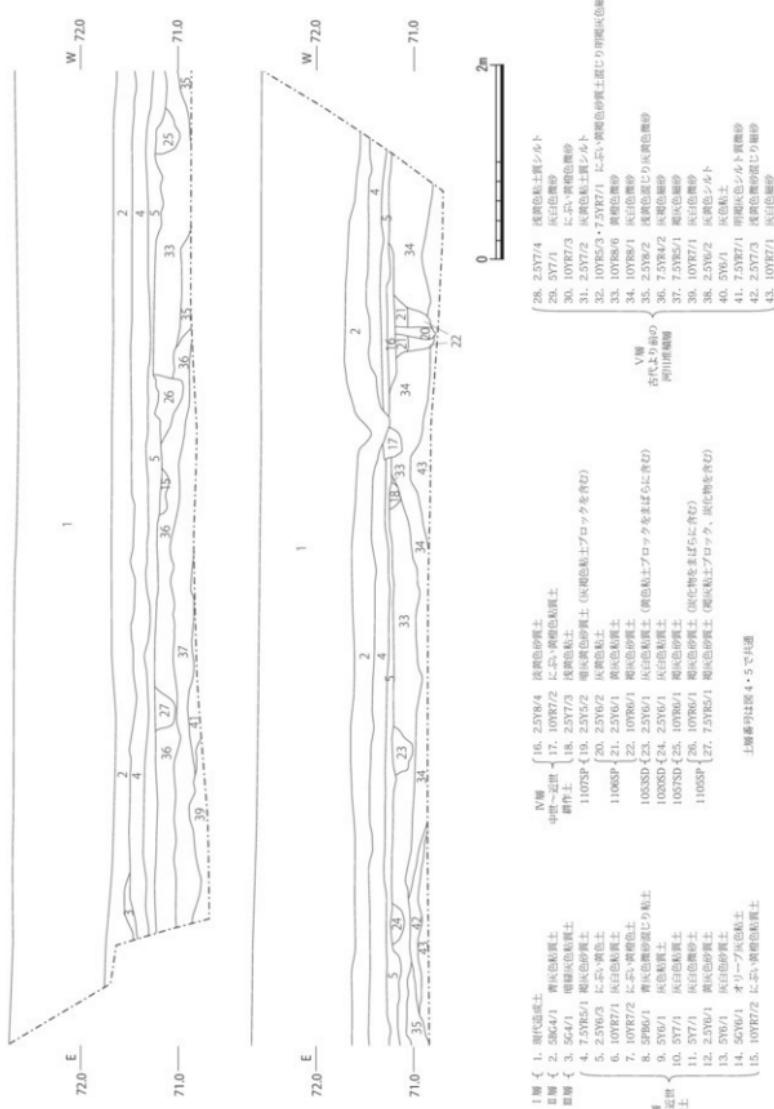


図5 1トレンチ調査区南壁 土層断面 (S = 1/50)

## 第2節 遺構

それぞれの遺構には4桁の遺構番号を付与している。遺構番号の頭の数字が遺構を検出した調査区を示しており、1トレンチは1001から、2トレンチは2001から、それぞれ概ね検出順に番号を付与している。

1トレンチには、II層上面から掘り込まれて遺構基盤層であるV層にまで達している現代の搅乱が数ヶ所に存在する。搅乱のうち最も規模が大きいものは調査区中央に位置する野井戸の跡である。野井戸は一辺約3.5mの隅丸方形の掘方をもち、中央に約1.8m四方の木組みの井戸枠が残されている。野井戸は最終的に埋められており、その埋め土からガラスやビニールの破片が出土している。野井戸が掘られた時期は不明であるが、調査地一帯の造成が行われる頃まで用いられていたと考えられる。遺構基盤層であるV層はやや軟弱な土質であり、広範囲を深く掘り下げた場合、大規模な壁面の崩落が生じる危険性が高いことなどから、野井戸については部分的な掘削にとどめ、周辺に存在する遺構の調査の際に必要に応じてその都度掘削を行っている。

この他、調査区の南東隅および南西隅付近にも搅乱が存在する。南東隅は遺構面から約0.2m、南西隅は遺構面から約0.5mの深さまで搅乱が及んでいる。いずれも範囲は調査区内に収まっており、調査区壁面に搅乱の断面は現れていない。

検出した遺構は、いずれもV層上面から掘り込まれている。調査はV層上面まで重機で掘削を行い、以後の作業は人力で行っている。V層上面の標高は、申請地の東隣に位置する黒田池の底面高と概ね同じである。

遺構は大きく中世と古代の2時期に分かれる。両者の検出面は同一であるが、ここでは中世の遺構を上層遺構、古代の遺構を下層遺構として報告を行う。なお、下層遺構の時期は古代が主であるが、古代から中世にかけての詳細な時期が不明な遺構も含まれている。これらの遺構については必要に応じて特記することとする。

調査区中央ではV層上面からさらに約1.4m下において、縄文時代中期末から晩期にかけての遺物が出土するVI層の存在を確認している。同時期の遺構・遺物が調査区内の他の部分にも存在する可能性があるものの、先述のとおり下層の調査に危険が伴うことや今回の工事計画における掘削はVI層の深さにまで及んでおらず遺跡が保護されることから、今回の調査では部分的な確認に留めている。

以下にそれぞれの遺構の詳細を述べる。

### 上層遺構（図6）

#### 耕作溝（1001～1043SD）

いわゆる中世素掘り溝と呼ばれる、耕作活動によって形成されたと考えられる溝である。

調査区の西半部を中心に存在する。東半部は中世より後の耕作によって古い時期の耕作溝が削平されたと考えられ、当初は調査区全域に広がっていたと想定される。

溝の方向は南北方向と東西方向とがあり、数量は東西方向が多い。東西方向の溝より南北方向の

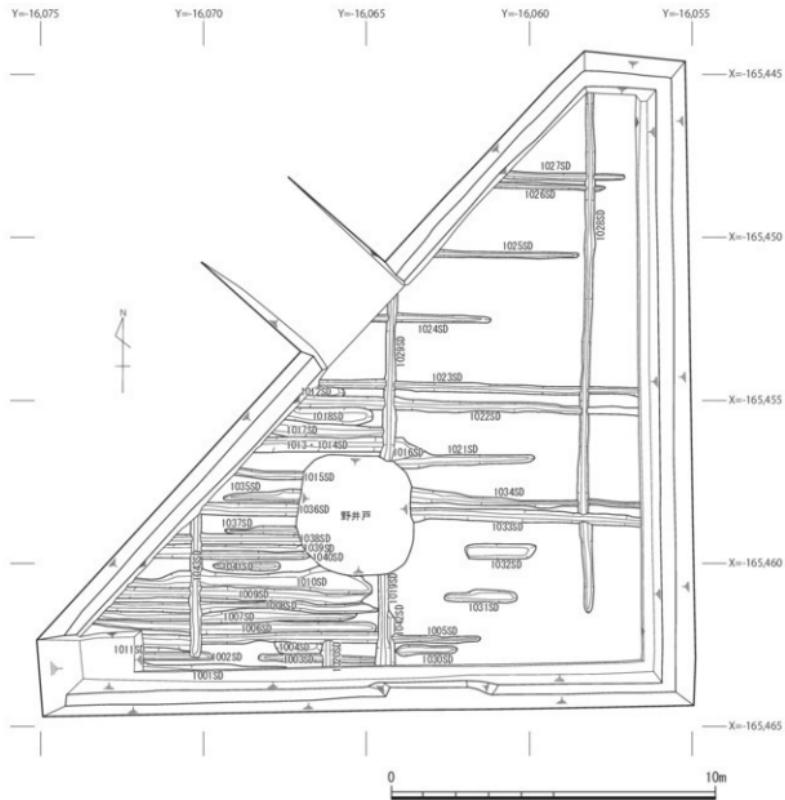


図6-1 トレンチ上層遺構 完掘状況平面図 (S=1/150)

溝のほうが古い遺構である。

南北方向の溝は深さ約0.15～0.3m、幅約0.3～0.4mを測る。うち1028・1029・1043SDは約6m間隔で並走する同規模の溝で、一連の耕作活動によるものである可能性がある。東西方向の溝は深さ約0.05～0.25m、幅約0.2～0.3mを測る。

出土遺物には須恵器、土師器、瓦器がある。瓦器は細片のみで数量も少なく、詳細な時期の特定が可能な資料はない。須恵器と土師器については、下層遺構に由来するものが多いと考えられる。

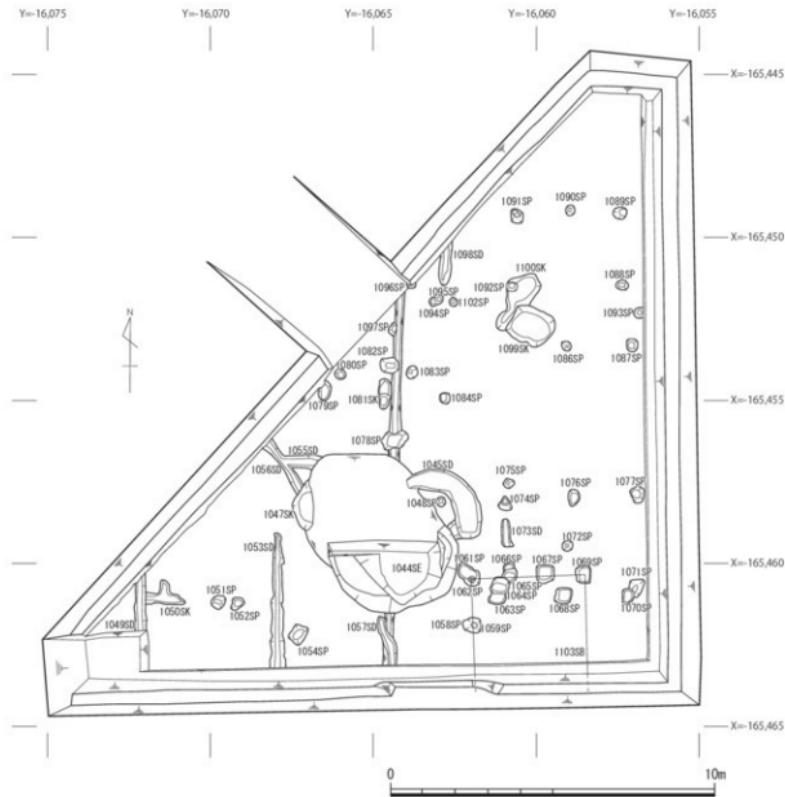


図7 1トレンチ下層遺構 平面図 (S = 1/150)

### 下層遺構（図7）

下層遺構は調査区の全体に存在し、南東側の密度がやや高い。時期が明確な遺構はいずれも藤原京期を中心とする古代である。遺構には掘立柱建物、井戸、土坑、溝、ピットがある。

#### 掘立柱建物（1103SB）

1103SBは調査区の南東部に位置する柱間3×2間以上の掘立柱建物である。南北棟の建物であると想定される。建物の規模は桁行3.0m以上、梁間3.3mである。建物の軸はほぼ正方位であるが、わずかに北で西に振れている。建物東辺北から二番目の柱穴については、周辺一帯が擾乱による削平を受けているため、消失してしまっていると考えられる。

柱穴は一辺約0.4～0.5mの方形、深さは検出面から約0.15～0.35mを測る。建物西辺の柱穴（1059・1062SP）には、柱の抜き取り穴と考えられるピット（1058・1061SP）が隣接して存在する。

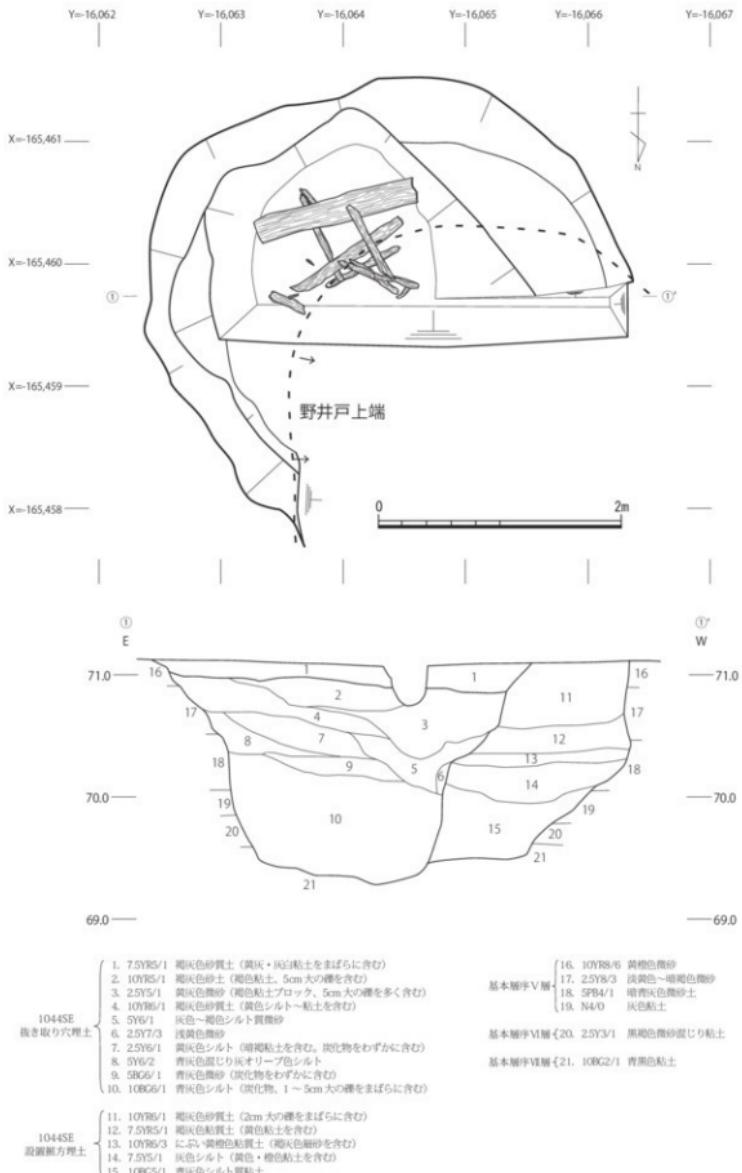


図 8-1 トレンチ 1044SE 平面・断面図 (S = 1/40)

出土遺物には土師器の細片がある。

#### 井戸（1044SE）

1044SEは調査区南半中央に位置する掘方円形の井戸である。遺構の北半部は現代の野井戸によって破壊されている。そのため、遺構の断面は井戸本来の東西中軸線よりもやや南の位置で確認を行っている。

井戸枠は抜き取りが行われており、その抜き取り行為や後世の擾乱によって井戸枠および井戸堀方の当初の規模は不明であるが、当初の設置掘方は直径約3m前後であると推定される。抜き取り穴の直径は約2.8mである。抜き取り穴は井戸の東側から掘られており、遺構の南西部には井戸設置掘方の埋土が部分的に残されている。井戸枠は当初から掘方の東寄りの位置に存在していたと考えられる。抜き取り穴は粗い砂混じりの土によって一気に埋められている。

井戸枠は大半が持ち去られており、抜き取り穴の埋土下間に井戸枠の一部と考えられる木材が少量残されていたのみであった。木材は厚さ1cm未満の薄い板材が主で、側板の補助に用いられていた部材の一部を投棄していったものと考えられる。

井戸の深さは検出面から約1.9mであり、調査時にも遺構の底面付近ではかなりの湧水が認められた。

出土遺物には須恵器、土師器、石器、縄文土器がある。井戸の時期は出土した須恵器・土師器から、藤原京期であると考えられる。掘方埋土と抜き取り穴埋土とでは出土遺物に顕著な時期差は見られない。縄文土器は下層まで深く掘削した際に混入したものと考えられる。

#### 土坑（1047・1050・1081・1099・1100SK）

土坑は調査区の各所で計5基存在する。

1047SKは調査区西半に位置する。遺構の東半が野井戸によって破壊されており当初の形状は不明であるが、直径1.5m以上の円形土坑である。深さは約0.5mを測る。出土遺物には須恵器・土師器がある。須恵器には小片ながら漆が付着した甕も含まれる。藤原京期の遺構である。

1050SKは調査区南西隅に位置する。深さ約0.05mを残すのみで、遺構の大半を耕作溝に削平されて

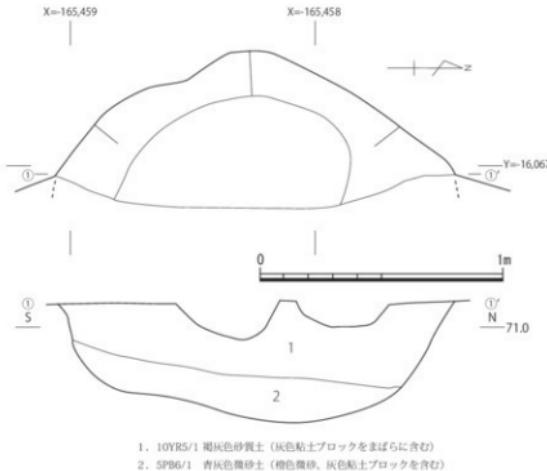


図9-1 トレンチ1047SK平面・断面図 (S = 1/20)

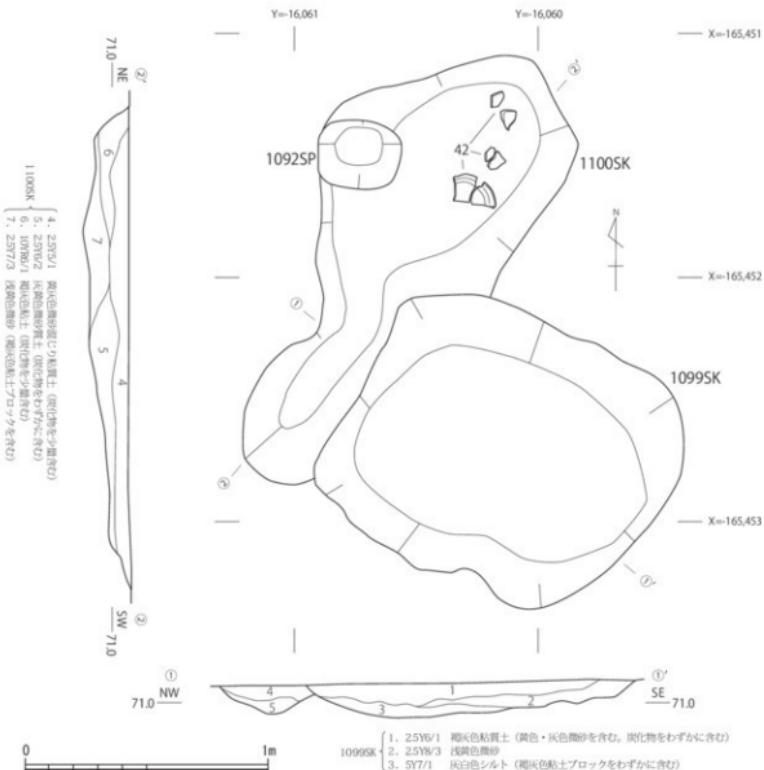


図10 1トレンチ1099・1100SK 平面・断面図 (S = 1/20)

いる。直径1m程度の土坑であったと考えられる。土師器の細片が出土している。

1081SKは調査区中央北に位置する長径約0.8×短径約0.3mの楕円形土坑である。深さは0.3mを測る。少量の炭化物と古代の土師器が出土している。

1099SKと1100SKは調査区北部に位置する重複関係を有する土坑である。1099SKのほうが新しい遺構である。1099SKは長径約1.5×短径約1.1mの楕円形土坑である。深さは約0.2mである。土師器が出土している。1100SKは長径約2.0×短径約0.9mの楕円形土坑である。深さは約0.2mである。藤原京期の須恵器、土師器が出土しており、土師器には大型の破片も含む。ふたつの土坑の埋土には少量の炭化物が含まれている。

溝（1045・1049・1053・1055・1056・1057・1073・1098SD）

耕作溝より古い時期の溝が8条存在する。

1045SDは調査区の中央に位置する平面形がL字状の溝である。北西端は野井戸に破壊されている。

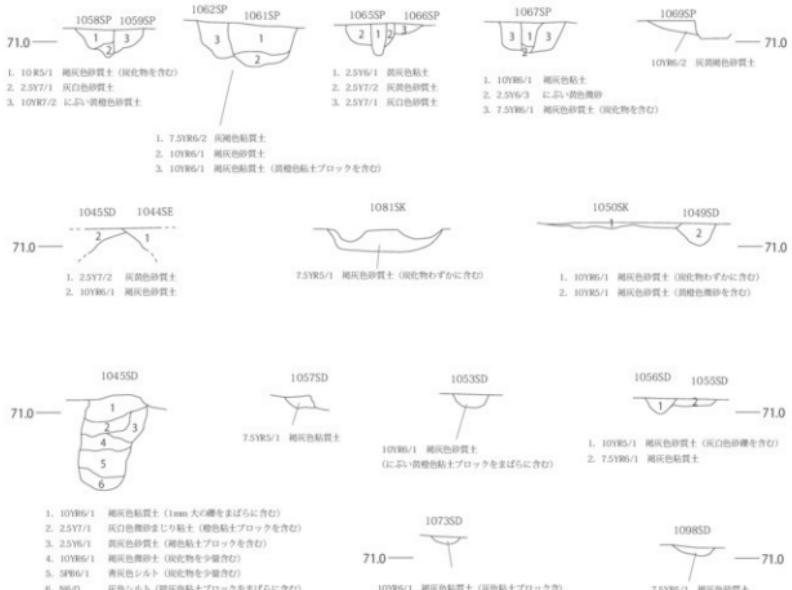


図 11-1 トレンチ SB・SD・SK 土層断面 (S = 1/40)

幅約 0.5 ~ 0.7 m、深さ約 0.7 ~ 0.8 m を測り、断面の形状は深いU字状を呈する。溝断面の側面はほぼ垂直に切り立つ。溝の南端部には、南西方向に伸びる深さ約 0.1 m の浅い溝が取り付き、その埋土を掘り込む形で 1044SE の抜き取り穴が存在する。藤原京期の須恵器・土師器が出土している。また、1044SE 同様、縄文土器の小片が出土している。

1045SD を除く 7 条の溝はいずれも幅約 0.3 ~ 0.5m、深さ約 0.2 ~ 0.3m を測る。1049・1053SD からは古代のものと考えられる土師器が出土しており、これらと埋土をほぼ同じくする残りの溝も古代の遺構である可能性が高いと考えられる。1049・1053・1073・1098SD は南北方向、1055SD は東西方向、1056・1057SD は南東-北西方向にそれぞれ伸びる。

## ピット

調査区全体で 45 基のピットを確認している。ここには先述の 1103 SB の柱穴を含む。

調査区南東部がもっとも密にピットが存在する。一辺 0.4m 前後の比較的規模の大きいピットが存在するのも南東部である。調査区北東に位置する 1089・1090・1091SP は東西方向に直線に並ぶ。いずれも直径約 0.2 m のピットで、柵のような簡素な構造物である可能性がある。調査区西半はピットの数が少ない。

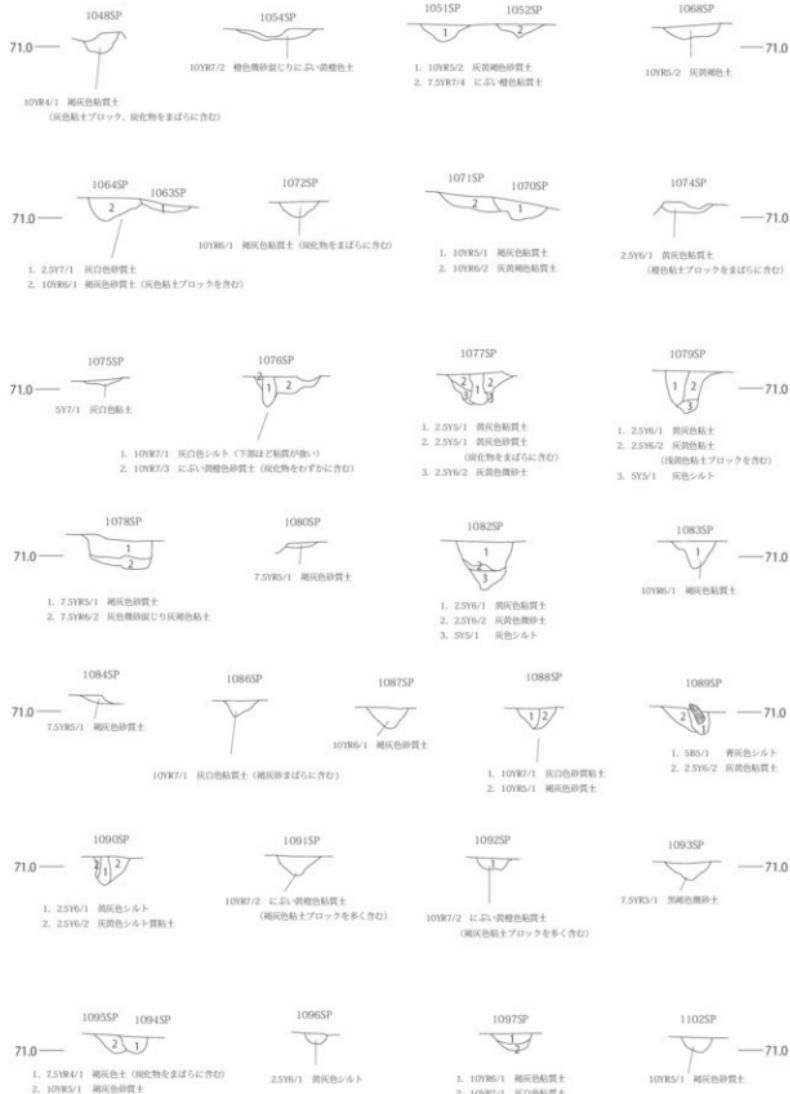


図 12 1 トレンチ SP 土層断面 (S = 1/40)

### 第3節 遺物

1トレンチの出土遺物には須恵器、土師器、ミニチュア土器、縄文土器、瓦器、石器がある。出土量はコンテナ約13箱分である。その大半を須恵器と土師器が占める。

1044SE(図13・14・15 №1～32)

須恵器、土師器、ミニチュア土器、縄文土器、石器が出土している。1トレンチでもっと多くの遺物が出土した遺構である。2、12～15、20～26、28、29が井戸設置掘方埋土からの出土で、他は井戸枠の抜き取り穴埋土からの出土である。

土器は他の遺構と比べて復元が可能な大型の破片が多い。縄文土器は遺構の底面付近から出土している。いずれも小片であるが、文様や器形がわかるものについて図示している。

1～7は須恵器である。1は皿蓋である。復元口径17.1cmを測る。内外面を回転ナデで仕上げる。2は高台付きの壺である。復元口径16.3cm、器高3.5cmを測る。全体をやや粗い回転ナデ調整で仕上げる。3は壺ないし壺の底部である。復元底径8.6cmを測る。4は瓶類ないし壺の口縁部である。復元口径8.6cmを測る。内面には回転ナデ調整による凹凸が明瞭に残る。内外面全体に黒漆が付着している。5は短頸壺である。復元口径6.8cm、体部径11.2cm、器高6.6cmを測る。口縁の端部がわずかに外反する。体部および頸部の稜は明瞭である。回転ナデで仕上げを行なうが体部外面下半には回転ヘラケズリの痕が残る。6は長頸壺である。復元口径11.1cm、体部径16.2cm、残存高20.7cmを

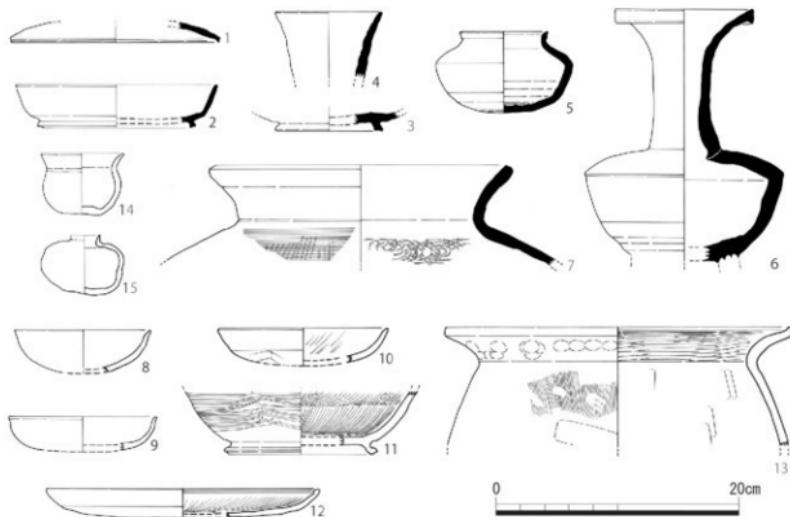


図13 1トレンチ 1044SE 出土 須恵器・土師器 (S = 1/4)

測る。体部上半に稜をもつ。口縁は外面に平坦な面を作り出す。体部外面上半と口縁～頸部内面には自然釉が付着する。体部内面には全体に漆が付着しており、頸部内面にも部分的に残る。7は甕の口縁部である。復元口径 23.7 cm を測る。体部外面にはタタキの後、カキ目を施す。

8～15は土師器である。8～10は壺である。8は復元口径 11.0 cm、復元高 3.6 cm を測る。口縁端部はわずかに外反する。口縁部にはヨコナデを施す。下半部は表面の磨滅により調整は不明である。9は平底の壺である。復元口径 11.7 cm、器高 2.7 cm を測る。口縁端部はわずかに外反する。回転ナデ調整を施すが、底部外面に指頭圧痕が残る。10は復元口径 13.8 cm を測る。口縁部は斜め上方に開き、端部は内傾する。内面には放射状のミガキを施す。外面下半にはケズリの痕が残る。11は高台付きの壺である。高台は外側に開き、中段を外に突出させる。全体に強いミガキを施すが、底部外面付近にはケズリの痕が残る。内面には2段の放射状暗文を丁寧に施す。12は皿である。復元口径 22.8 cm を測る。内面には放射状の暗文を施す。13は甕である。復元口径 28.0 cm を測る。口縁は外反し、端部は上方につまみ上げる。ハケおよびナデ調整によって仕上げているが、内外面に指頭圧痕やケズリの痕が残る。

14・15は土師質のミニチュア土器である。どちらも完形品である。14は井戸の掘方埋土中層、15は同下層からの出土であり、井戸構築時の祭祀に用いられた可能性がある。14は広口の壺形を呈し、口径 6.6 cm、器高 5.7 cm を測る。底部は平底で口縁部はゆるやかに外反する。全体をナデ調整で仕上げている。頸部外面には粘土紐の接合痕が残る。15は横瓶形であり、扁球形の体部に短い口縁が付く。口径 2.2 cm、体部長 4.4 × 6.6 cm、器高 4.8 cm を測る。全体をナデ調整によって仕上げる。口縁部の周囲にはやや強くナデ調整を施している。

16～28は縄文土器である。いずれも井戸底面付近から出土しており、井戸の構築・抜き取りの際にVI層中に含まれていたものが巻き込まれた可能性が高い。16～24は口縁の破片である。16は波状口縁の破片で、厚さ約 1.1 cm を測る。17は外面上部に縄文を施す。口縁端部はわずかに平坦な面をもち内傾する。厚さ 0.9 cm を測る。18は外面上端部に断面三角形の凸帯を貼り付け、刻み目を施す。刻み目は 0.7 cm 間隔で並ぶ。凸帯の下にはナデ調整を施す。厚さは 0.6 cm を測る。19は外面口縁部下に凹線を施す。厚さ 0.8 cm を測る。それぞれの凹線の幅は 0.5 cm 前後である。内面にはケズリを施す。口縁端部は平坦でわずかに内に飛び出す。

20は波状口縁の頂部であると考えられる。外面には磨消縄文を施す。21は内外面とも条痕調整を施す。厚さ 0.7 cm を測る。22・23は磨消縄文を施す波状口縁の破片である。厚さはともに 0.9 cm を測る。24は外面に波状の凹線を粗く施す。25～27は体部の破片である。25は外面にヘラ状工具で細い沈線を施す。厚さ 0.8 cm を測る。26は外面に磨消縄文を施し、厚さは 0.6 cm を測る。27は直径 0.8 cm の円形刺突が継に 2 つ並び、その横から凹線文が施される。厚さ 1.1 ~ 1.5 cm を測る。28は平底の底部である。復元底径 8.2 cm を測る。外面には指頭圧痕が残る。縄文土器の時期は中期末から後期を中心とし、一部は晩期の資料が含まれる。

29・30はサヌカイトの石核である。いずれも井戸設置掘方の底面付近からの出土である。重量は 29 が 105.9g、30 が 136.1g を測る。

31は花崗岩の敲石である。抜き取り穴最上層からの出土である。残存部は直径 7.5 cm の半球形で、重量は 257.2g を測る。頂部に敲打痕がある。敲打痕部分も含めて全体に磨滅しており、磨石としても用いていたと考えられる。32は石錘である。抜き取り穴下層からの出土である。長径 5.4 cm、短

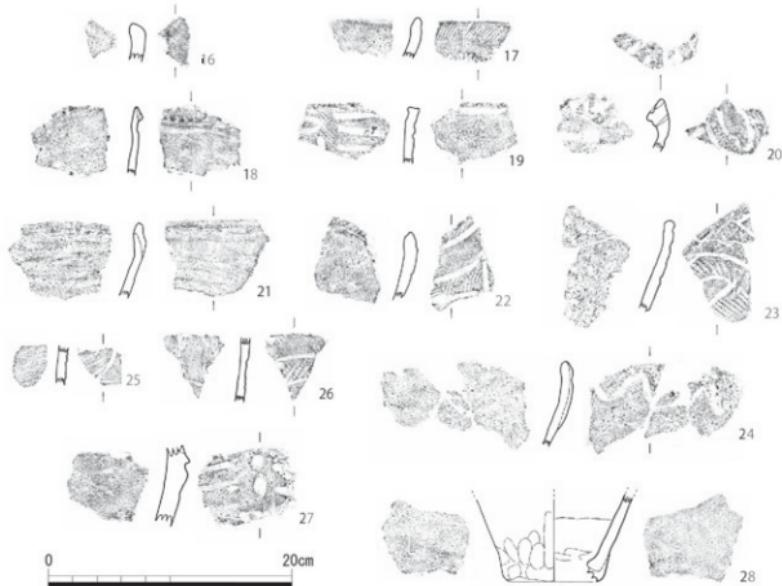


図 14 1 ブレンチ 1044SE 出土 繩文土器 ( $S = 1/4$ )

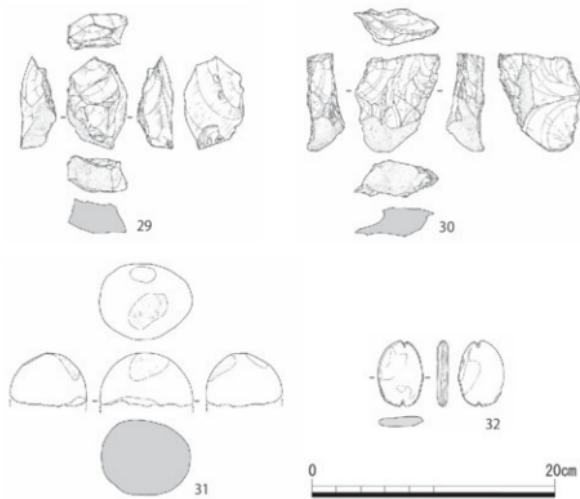


図 15 1 ブレンチ 1044SE 出土 石器 ( $S = 1/4$ )

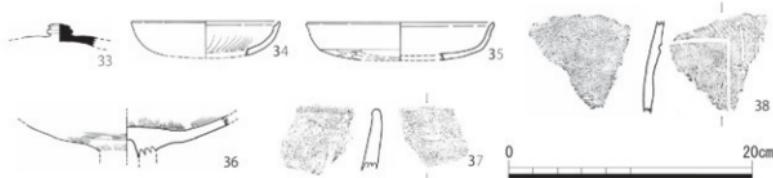


図 16 1 ブレンチ 1045SD 出土 須恵器・土師器・縄文土器 (S = 1/4)

径 3.7 cm、厚さ 0.8 cm、重量 24.0g を測る。両端に三角の切り欠きをもつ。

#### 1045SD (図 16 № 33 ~ 38)

33 は須恵器蓋のつまみである。つまみの中ほどに沈線が巡り、2段になっている。

34 ~ 36 は土師器である。34 は環で、復元口径 12.0 cm を測る。口縁部内面には段が付く。内面下半には放射状暗文を施す。35 は環で 15.4 cm を測る。口縁部端面は内傾する。ヘラケズリの後、ナデ調整で仕上げる。36 は盤ないし高環の頸部である。内外面とも脚部と环部の接続部にハケを施す。

37・38 は縄文土器である。37 は口縁の破片で厚さ 1.0 cm を測る。口縁端部は丸く、わずかに内に飛び出す。38 は体部の破片で、外面に磨消縄文を施す。厚さ 0.8 cm を測る。縄文部分に直径 0.2 cm、深さ 0.2 cm の円形刺突が 2ヶ所に存在する。

#### 1047SK (図 17 № 39・40)

39 は土師器環である。復元口径 14.4 cm、器高 2.5 cm を測る。口縁端部はわずかに外反する。外面にはミガキ、内面には放射状暗文を施す。40 は鍋である。把手は根本部分のみが残されている。内外面とも強いハケによって整形を行い、口縁部にはナデ調整を施す。

#### 1050SK (図 17 № 41)

41 は土師器環である。復元口径 18.2 cm、器高 3.4 cm を測る。口縁端部は内側に肥厚させて丸くおさめる。内面には放射状暗文を施す。

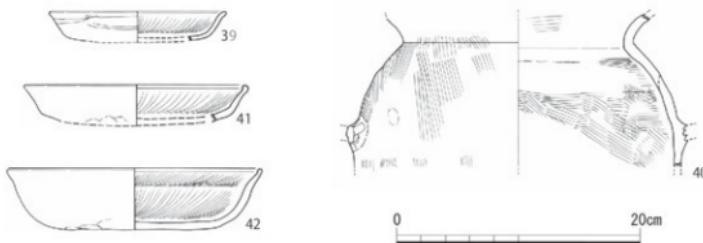


図 17 1 ブレンチ 1047SK・1050SK・1100SK 出土 土師器 (S = 1/4)

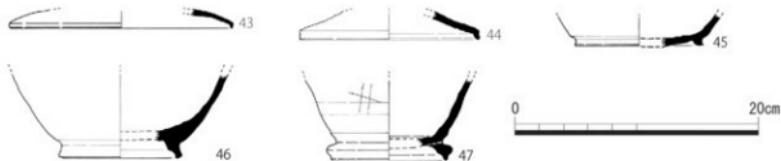


図 18 1トレンチ 耕作層出土 須恵器 ( $S = 1/4$ )

#### 1100SK (図 17 № 42)

42は土師器壺である。全体の約半分が遺存する。口径20.6cm、器高5.0cmを測る。内面には2段の放射状暗文を施す。外面の調整は器壁の磨滅のため不明である。

#### 耕作層 (図 18・19 № 43～48)

43～47は中世以降の耕作層から出土した須恵器である。下層遺構に由来する遺物であると考えられる。43・44は蓋である。43は復元口径18.0cmを測る。44は復元口径14.6cmを測り、中央部が上方に反る形状である。45は壺の底部である。高台がやや潰れている。46・47は壺ないし瓶類の底部である。どちらも内外面にやや粗い回転ナデ調整を施す。47は外面にヘラ記号をもつ。

48はサヌカイトの石鏃である。長さ2.5cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量0.93gを測る。

#### 野井戸 (図 20 № 49・50)

野井戸には現代のビニールや瓦が投棄されているが、それらと混ざって古代の遺物が少量出土している。49は土師器壺である。復元口径11.8cmを測る。全体をナデ調整で仕上げる。50は土師器皿である。復元口径22.8cm、器高2.3cmを測る。端部は内側に肥厚させる。

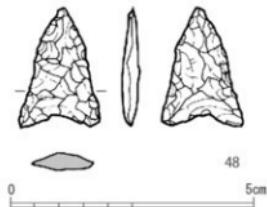


図 19 1トレンチ 耕作層出土 石鏃 ( $S = 1/4$ )



図 20 1トレンチ 野井戸出土 土師器 ( $S = 1/4$ )

## 第Ⅲ章 2 ドレンチの調査

### 第1節 層序

1 ドレンチと 2 ドレンチとでは基本的な層序が異なる。遺構面より上の中世以降の堆積土については概ね共通するが、遺構面下の状況については差異がある。

2 ドレンチの基本層序およびその詳細は以下のとおりである。

i 層：現代の造成土（1 層）

ii 層：造成以前の耕作土（2 層）

iii 層：床上。近世以降の耕作土（3 層）

iv 層：中世～近世の耕作土（4 ～ 13 層）

v 層：藤原京整地層。上面が上層・中層遺構面（31 層）

vi 層：古代より前の河川堆積層（32 ～ 43 層）

vii 層：地山。縄文時代より前の堆積層。上面が下層遺構面（44 層）

土層番号は図 21・22 を参照

i 層は調査地全体に広がる現代の造成土である。上面の標高は 71.3 ～ 71.5 m で、西側が低くなっている。造成土の厚さは 2 ドレンチ周辺では約 0.5 ～ 0.7 m を測る。2 ドレンチ周辺の造成土内には多量の瓦礫が含まれており、調査区壁面にも多く残されている。調査区東半には造成時の廃棄土坑と考えられる搅乱が存在する。

ii 層は造成以前の旧耕作土で、時期は現代である。上面の標高は 70.8 ～ 70.9 m である。造成の際に部分的に削平を受けているものの、概ね当初の上面を残している。調査区内を東西に横断する暗渠もここに含まれる。

iii 層は ii 層の床上にあたる耕作土である。近世以降の堆積と考えられる。上面の標高は 70.7 ～ 70.8 m である。

iv 層は中世から近世にかけての耕作土である。いわゆる素掘り耕作溝はここに含まれる。上面の標高は 70.6 ～ 70.7 m である。浅黄色粘質土・灰黄粘色土からなる。iv 層は調査区の東半には薄く面的に広がるが、西半では近世以降の耕作（ii・iii 層）によって削平され、耕作溝として残るのみである。

v 層は藤原京整地層である。灰色・褐色系の粘土ブロックをまばらに含む褐灰色砂質土で、下部はやや砂質が強い。整地層中には藤原京期の須恵器・土師器が含まれている。わずかに炭化物も含む。上面の標高は 70.5 ～ 70.6 m で、西側が低くなっている。v 層が存在する範囲は、2022SD 西肩より西に約 1m の地点から調査区西端より東に約 2m の地点までであり、調査区東・西端付近には存在しない。v 層の厚さは、後述する 2021SX 付近を除くと約 0.05 ～ 0.20 m である。v 層は後世の耕作により上面はかなり削平されていると考えられる。

v 層上面が上層遺構および中層遺構の遺構面である。ただし、v 層の厚みが薄くなる、もしくは存

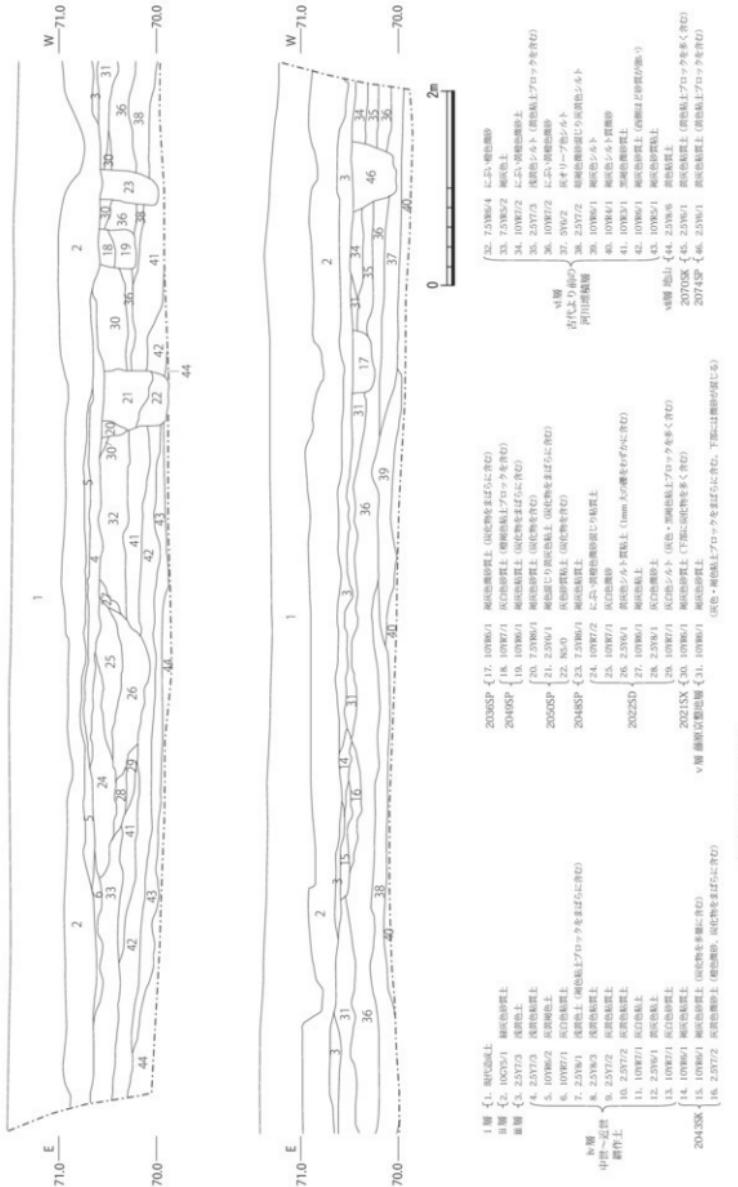


図21-2 トレンチ 調査区南壁 土層断面 (S=1/50)

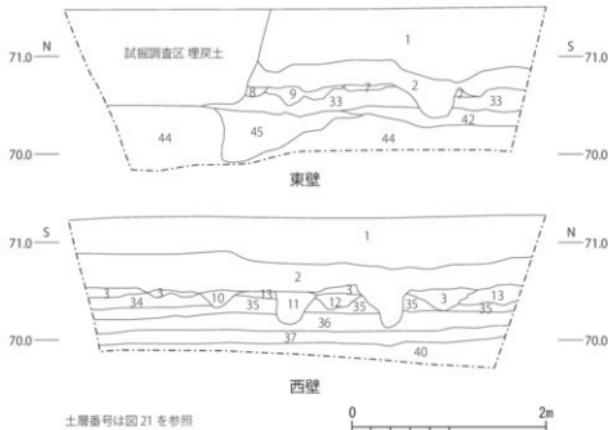


図22 2トレンチ 調査区 東・西壁 土層断面 (S=1/50)

在しない調査区東・西端一帯ではvi層上面での遺構検出となっている。

vi層は調査区全体に広がる古代より古い時期の堆積層である。上面の標高は70.4～70.5mである。vi層の厚さは調査区東端で約0.2m、西端で0.7m以上を測る。褐灰色砂質土・黒褐色微砂質土・にぶい黄橙色微砂・灰黄色シルトなどの砂質土層からなる。河川堆積層であると考えられる。調査区西側ほど微砂・シルト質が強い軟弱な地盤となる。また、西側は湧水量も多くなる。vi層から遺物は出土していないため詳細な時期は不明であるが、v・vi・vi層各上面に存在する遺構の時期から、縄文時代から古代までのいずれかの時期に堆積したと考えられる。

vii層は地山である。縄文時代以前の堆積土で、黄色粘質土からなる。調査区の東端約7mの範囲のみで検出している。上面の標高は調査区東端で70.3mであるが、西に向かって急速に沈み込んでいく。vii層上面が下層遺構（縄文時代晚期）の遺構面である。

第2節 遺構

遺構には4桁の遺構番号を付与している。遺構番号の頭の数字が調査区を示しており、2トレンチは2001から、概ね検出順に番号を付与している。

2 トレチ東側(2022SDの南半部分)には、ii層上面から掘り込まれてv～vii層にまで達している現代の壊乱が存在する。

2 トレーナー北東部には北側試掘調査区の西半部が含まれている。調査区北東隅の段差はその痕跡である。

遺構は大きく中世、古代、縄文時代の3時期に分かれる。中世および古代の遺構はv層上面から、縄文時代の遺構はvi層上面から、それぞれ掘り込まれている。調査はv層上面まで重機で掘削を行い、以後の作業は人力で行っている。

中世および古代の遺構はv・vi層の上面で検出している。v・vi層上面の標高は1トレンチの遺構面より約0.7m低い。整地層であるv層上面では遺構の認識が困難な部分があったため、必要に応じてv層上層を面的にすき取りつつ、検出作業を行っている。調査の過程で下層のvii層上面に遺構が存在することを調査区東壁断面で確認したため、調査区東半のv・vi層を人力で掘り下げを行い、縄文時代の遺構を検出している。

ここでは中世の遺構を上層遺構、古代の遺構を中層遺構、縄文時代の遺構を下層遺構として報告を行う。なお、中層遺構と下層遺構は検出面が異なるが、図24では両者を合成して作図を行っている。

以下にそれぞれの遺構の詳細を述べる。

### 上層遺構（図23）

耕作溝（2001～2020SD。  
2005を除く）

いわゆる中世素掘り溝と呼ばれる、耕作活動によって形成さ

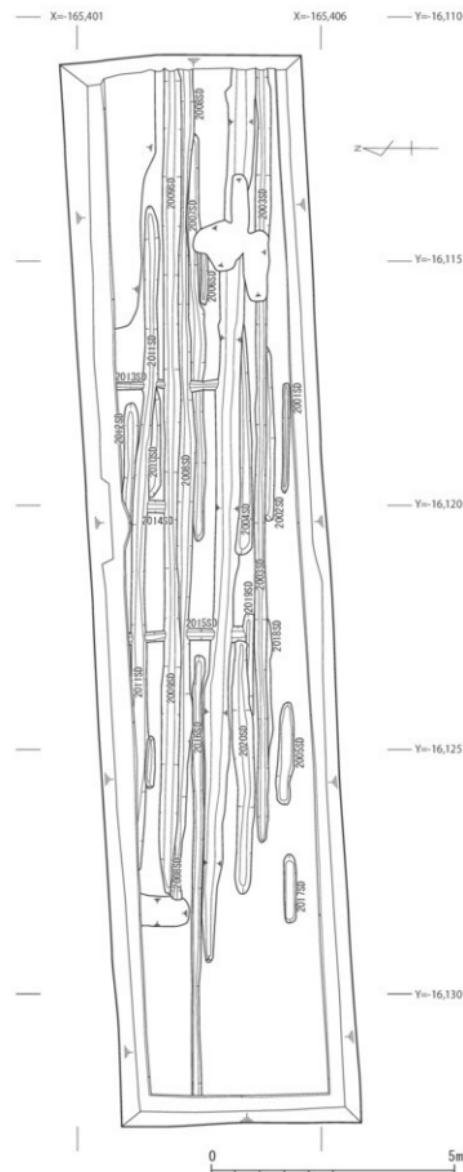


図23 2トレンチ 上層遺構 完掘状況平面図 (S = 1/100)

れたと考えられる溝である。調査区のほぼ全体に広がって存在するが、西端部付近では後世の耕作によって削平されており数は少ない。

溝の方向は南北方向と東西方向があり、数量は東西方向が多数を占める。東西方向の溝より南北方向の溝のほうが古い遺構である。

南北方向の溝は幅約 0.3m を測り、深さはいずれも 0.1 m 未溝である。東西方向の溝は幅約 0.2 ~ 0.4m、深さ最大約 0.3m を測る。

出土遺物には須恵器、土師器、瓦器、石器がある。大半が下層の遺構に由来すると考えられる古代の遺物であり、その中に少量の中世の土器片が混ざる。詳細な時期は判別が困難である。

### 中層遺構（図 24）

中層遺構は調査区の全体に存在し、とくに調査区中央から西側にかけては多数のピットが存在している。時期が明確な遺構はいずれも藤原京期である。調査区中央付近のピットは藤原京整地層上面から掘り込まれている。そのため、整地層内に含まれている藤原京期の遺物が各遺構の埋土内に含まれている。他の時期の遺物を含まず、遺構埋土の土質も藤原京期の遺構と近いことから、これらのピットの大半も藤原京期の遺構であると考えられる。

遺構には掘立柱建物、塀、土坑、溝、落ち込み、ピットがある。

### 掘立柱建物（2072SB）

調査区の北西部に位置する柱間 2 × 1 間以上の掘立柱建物である。南北棟の側柱建物であると考えられる。建物の規模は桁行 1.5 m 以上、梁間 3.3 m である。建物の軸はほぼ正方位である。

柱掘方は一辺約 0.5 ~ 0.9m の方形を呈し、南北にやや長いものが見られる。掘方の断面形は U 字状を呈し、深さは検出面から約 0.5 ~ 0.7m を測る。いずれも掘方の中心付近に柱を据えるが、底面高は柱によって 0.2m 程度の差異がある。北西の 2025SP には直径約 0.15m の柱材が遺存している。

出土遺物には須恵器、土師器がある。時期は藤原京期である。

### 塀（2073SA）

調査区西端部に位置する南北方向の柱列である。ここでは塀として扱うが、建物の一部である可能性もある。

一辺約 0.6 ~ 0.8 m の方形ないし楕円形の柱穴が 3 基、南北方向に並ぶ。柱列の検出長は約 4.2m である。掘方の深さは検出面から約 0.3 ~ 0.5m を測る。

出土遺物には土師器の小片がある。

### 土坑（2043SK）

調査区南西部に位置する不整形土坑である。東西約 2.1m、南北約 1.2 m 以上、深さ約 0.2m を測る。埋土には炭化物が一定量含まれる。

出土遺物には須恵器、土師器がある。土師器には鍋が含まれる。

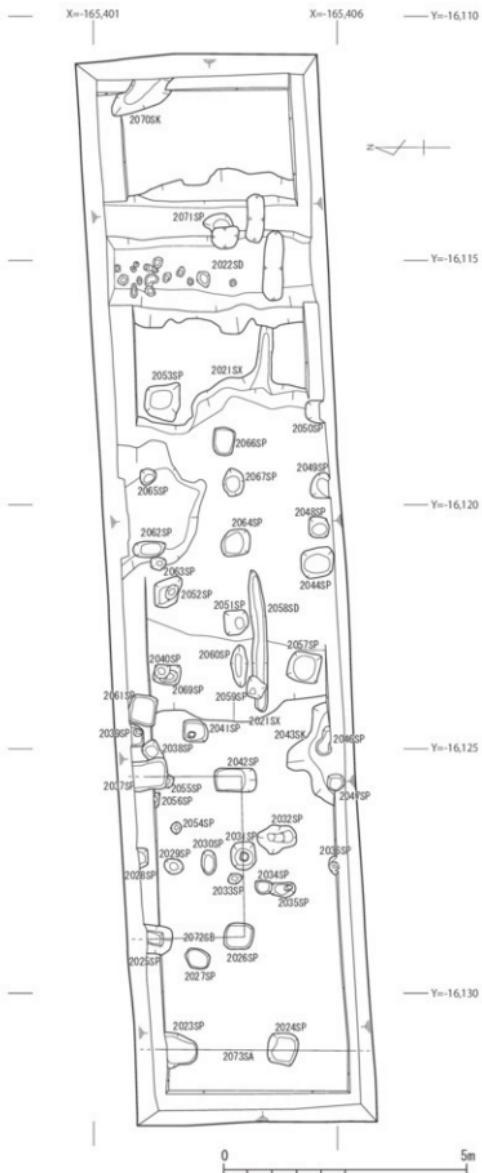


図24 2トレンチ中・下層遺構 平面図 (S = 1/100)

#### 溝（2022SD）

調査区東部に位置する南北溝である。上幅約2.5~2.7m、深さ約0.6mを測る。断面の形状は緩やかな半円形を描く。溝の西半部は掘り直しが行われている。掘り直しの際に西側の底が深くなってしまい、東側に小さな高台として段が残る形となっている。

溝の底面北側には、直径約0.05~0.20m、深さ約0.05m前後の不整形なくぼみが多数存在する。溝掘削時の足跡の痕跡である可能性などが考えられる。

出土遺物には須恵器、土師器、砥石、粘土塊、燃えさしがある。時期は藤原京期である。掘り直し前・後の堆積土の間に顕著な時期差はない。

#### 溝（2058SD）

調査区中央に位置する東西方向の溝である。長さ約3.2m、幅約0.3m、深さ約0.2mを測る。遺物は出土していないが、藤原京期と考えられる2059SPよりも古い遺構である。

#### 落ち込み（2021SX）

調査区中央に位置する地形の落ち込みである。もっとも深い北側の地点でv層上面からの深さ約0.4mを測る。落ち込みは整地層を施す際に埋められており、埋土は本来、整地層と一連

のものである。この落ち込み付近は出土遺物も多いことから、2021SXとして周囲とは別に認識して調査を行っている。

出土遺物には須恵器、土師器がある。また、埋土には直径約0.05～0.15mの大の自然石も含まれている。

### ピット

調査区全体で43基のピットを確認している。うち8基は先述の2072SB・2073SAの柱穴である。古代に属すと考えられるピットは2022SDよりも西側にのみ存在する。

ピットの規模は直径約0.2m程度の小規模な平面円形のものから、一边約0.5～0.6mの方形のものまでが存在する。ピットの規模は全体に1トレンチで検出しているピットより大きい。調査区中央にはピットが東西に並ぶ地点が見られ、これらも建物ないし壇の一部である可能性がある。

### 下層遺構（図24）

下層遺構はⅥ層上面で検出している。下層遺構は土坑1基とピット1基である。いずれも調査区東端付近のⅥ層が高台として残る範囲に存在している。いずれも縄文時代晩期の遺構であると考えられる。

#### 土坑（2070SK）

調査区北東隅に位置する土坑である。全体像は不明で、溝の端部である可能性もある。検出長約1.0m、深さ約0.5mを測る。

出土遺物には縄文土器、サヌカイトの石核・剥片がある。埋土には炭化物も含まれている。

#### ピット（2071SP）

中層遺構2022SDの東側底面で検出した円形ピットである。直径約0.5m、深さ約0.3mを測る。遺物は出土していないが、検出高および2070SKとの埋土の共通性から、縄文時代の遺構であると判断している。

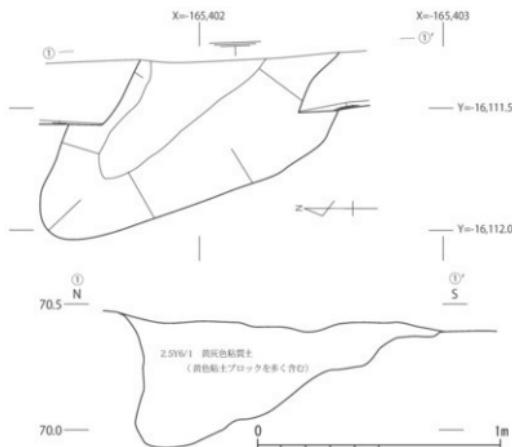


図25 2トレンチ2070SK 平面・断面図 (S = 1/20)  
（出土高および2070SKとの埋土の共通性から、縄文時代の遺構であると判断している。）

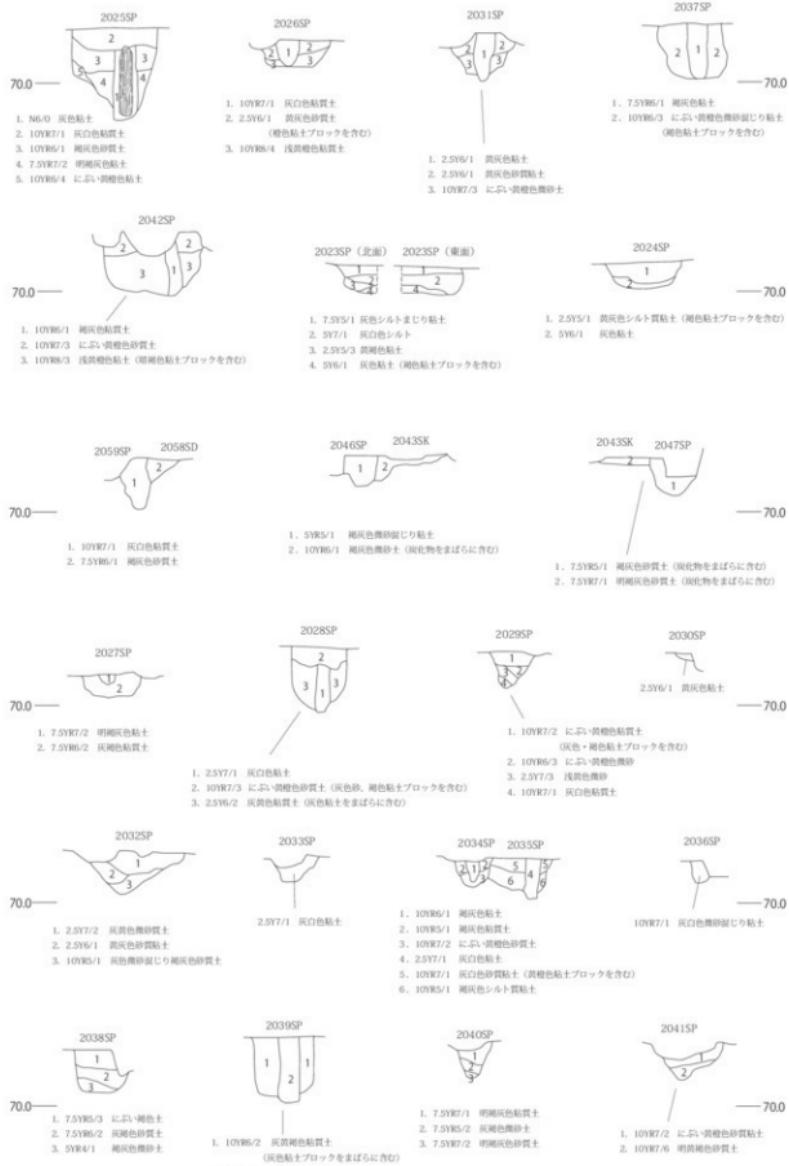


図 26 2トレンチ SB・SA・SK・SD・SP 土層断面 ( $S = 1/40$ )

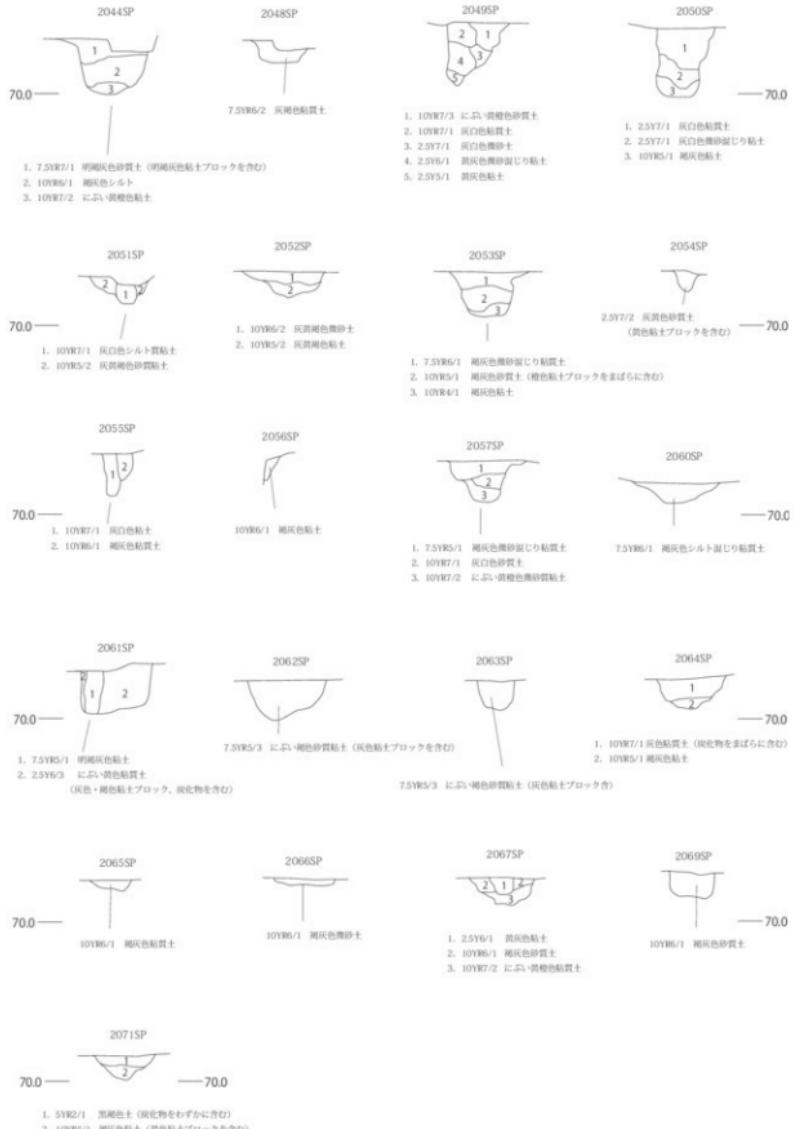


図 27 2トレンチ SP 土層断面 (S = 1/40)

### 第3節 遺物

2トレンチの出土遺物には須恵器、土師器、縄文土器、瓦器、石器、木製品がある。出土量はコンテナ約15箱分である。その大半を須恵器と土師器が占める。ここでは出土遺構・層序ごとに報告を行う。

2022SD(図28・29 №51~71)

2トレンチでもっとも多く遺物が出土した遺構である。須恵器・土師器が主で、少量の粘土塊や燃え差しなども含まれる。

51~58は須恵器である。51は壺蓋である。全体の約8割が遺存している。復元口径16.0cmを測る。頂部は平坦で、端部はわずかに内に折り返す。内面にはわずかに漆が付着している。52~56は壺である。52は復元口径12.7cm、器高3.0cmを測る。53は復元口径12.9cm、器高4.2cmを測る。底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整で仕上げる。54は壺の底部である可能性もある。55は口径15.4cm、器高4.4cmを測る。底部内面中央はややくぼむ。全体を丁寧な回転ナデ調整で仕上げる。底部外面にはわずかに回転ヘラケズリの痕が残る。56は壺の底部である。調整は55と同様である。57は壺ないし瓶類の底部である。復元底径9.2cm、厚さ0.8cmを測る。内外面とも回転ナデ調整で仕上げる。高台は下半がやや膨れ、底部との接続痕が残る。58は壺の底部である。底径11.6cmの平底である。内面には強い回転ケズリの痕が残る。体部外面は回転ナデ調整で仕上げる。底部外面はナデ調整を施すが、指頭圧痕が残る。

59~70は土師器である。59は壺状を呈するが器種・用途は不明である。口径8.2cm、厚さ0.8cmを測る。外面は粗いハケ、内面は粗いミガキを施す。内面には煤が付着している。60は盤の脚部裾である。復元底径13.6cmを測る。脚部にはケズリ、裾外面にはミガキを施す。61は盤の脚部である。60とは別個体である。脚部外面は面取りを行っている。全周で11面に分かれが、各面の幅は不均等である。内面上部にはケズリを施した際の傷が残る。62~64は壺である。62は底部を欠くが丸底に近い。復元口径16.2cmを測る。外面には黒范がある。63は平底の壺である。口径18.1cm、器高5.0cmを測る。口縁は直線的に開き、端部は内側に折り返す。外面には横方向のミガキ、内面には2段の放射状暗文を施す。64は復元口径17.0cm、器高2.8cmを測る。表面の磨滅のため調整は不明である。65は皿である。復元口径21.7cm、器高2.3cmを測る。端部は小さく内側に折り返す。内面には放射状の暗文を施す。66は皿である。外側に大きく開く高台をもつ。復元口径18.8cm、器高3.1cmを測る。全体をナデ調整で仕上げる。口縁端部は内側に肥厚させる。67は大型の盤ないし皿であると考えられる。口縁部は外側に大きく開く。復元口径29.2cmを測る。内面には2段の放射状暗文を施す。68~70は甕である。68は口縁部から肩部にかけての破片で、復元口径26.1cmを測る。口縁部は外反し、端部は上方につまみ上げる。69は大きく外反する口縁部をもつ。端部は小さく上方につまみ上げ、外側に面を作る。やや粗いハケ調整の後、ナデ調整を施す。70は頸部から体部上半である。復元体部径33.0cmを測る。ハケ調整を内面は横方向、外面は縦方向に施す。

71は砥石である。上端・下端は欠損しているが、残る四面はいざれも研磨に用いていたようである。上下で厚みが異なり、上部は厚さ2.0cm、下部は厚さ3.2cmを測る。

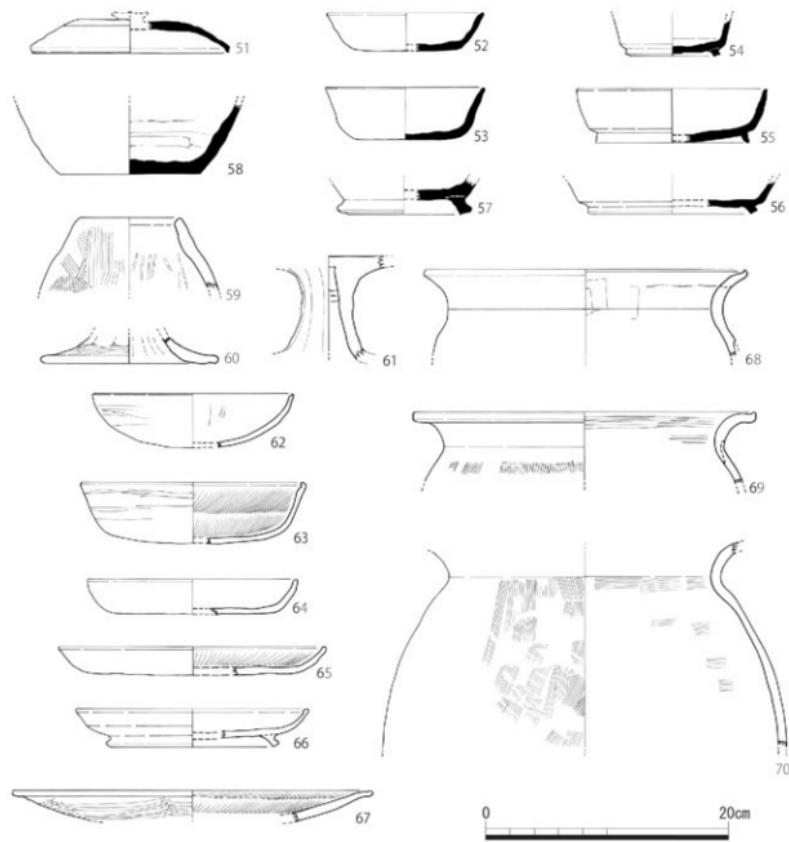


図 28 2トレンチ 2022SD 出土 須恵器・土師器 (S = 1/4)

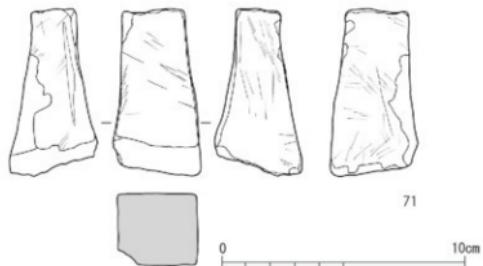


図 29 2トレンチ 2022SD 出土 砥石 (S = 1/2)

2037SP (図 30 № 72)

72 は土師器の壆である。復元  
口径 19.0 cm を測る。口縁端部は  
内傾して面をもたせる。

2042SP (図 30 № 73)

73 は須恵器の蓋である。復元  
口径 13.2 cm を測る。頂部に向か

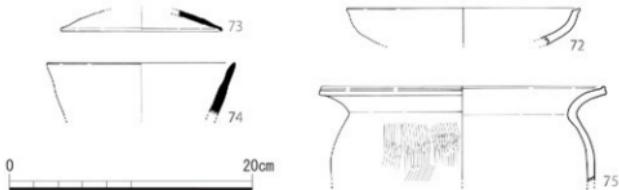


図 30 2037SP・2042SP・2044SP・2053SK 出土 須恵器・土師器 (S = 1/4)

って直線的に立ち上がる。端部は下方に小さく折り返す。

#### 2044SP (図 30 № 74)

74 は須恵器の壺ないし瓶類の口縁部である。復元口径 15.4 cm を測る。端部は直線的に尖らせる。内外面ともやや強い回転ナデ調整を施す。

#### 2053SK (図 30 № 75)

75 は土師器甕の上半部である。復元口径 22.9 cm を測る。口縁部は大きく外反し、端部は肥厚させ外側に面を作り出す。体部外面には縱方向のハケ調整、内面および口縁部外面はナデ調整を施す。

#### 2021SX (図 31 № 76 ~ 102)

先述のとおり、藤原京整地層 (v 層) からは須恵器、土師器が出土している。多くは細片であるが、整地以前の地形の落ち込みである 2021SX からは図化可能な大型の破片が比較的多く出土している。2022SD 出土遺物と比較すると表面の磨滅が激しいものが多い。

76 ~ 84 は須恵器である。76・77 は蓋である。76 は復元口径 13.8 cm を測り、断面三角形の低いかえりが付く。77 は復元口径 15.0 cm を測る。端部は下方に小さく折り返す。78 ~ 80 は壺である。78 は復元口径 14.3 cm を測る。口縁部は内外面とも回転ナデ調整を施す。内面にはわずかながら漆が付着している。79 は高台付きの壺である。口径 16.6 cm、器高 3.8 cm を測る。全体をやや強い回転ナデ調整で仕上げる。底部外面には回転ヘラケズリの痕が残る。80 は高台付きの壺である。復元口径 16.7 cm、器高 4.0 cm を測る。高台は裾が外側に広がる。81 は皿である。復元口径 22.8 cm を測る。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。82 は平底の壺の底部である。復元底径 17.6 cm を測る。全体を回転ナデ調整で仕上げるが、外面にわずかに回転ヘラケズリの痕が残る。83 は瓶類の口縁部である。復元口径 14.2 cm を測る。上半に 2 ~ 3 条の沈線が巡る。84 は瓶類の底部ないし側面部である。粘土版を貼り付けて体部の封をしたと考えられる段差が外面に残る。

85 ~ 102 は土師器である。85 ~ 90 は壺である。85 は復元口径 13.3 cm を測る。口縁部は端部付近が小さく外反する。86 は復元口径 12.0 cm、器高 3.0 cm を測る。わずかに丸みをおびた平底で、口縁部は端部付近が小さく外反する。87 は復元口径 13.9 cm、器高 2.9 cm を測る。口縁部は直線的に開く。88 は口径 14.5 cm、器高 3.5 cm を測る。口縁端部は尖らせ、わずかに外傾させる。底部外面には黒斑がある。85 ~ 88 はいずれも表面が磨滅しており、調整は不明である。89 は丸底の底部と外反

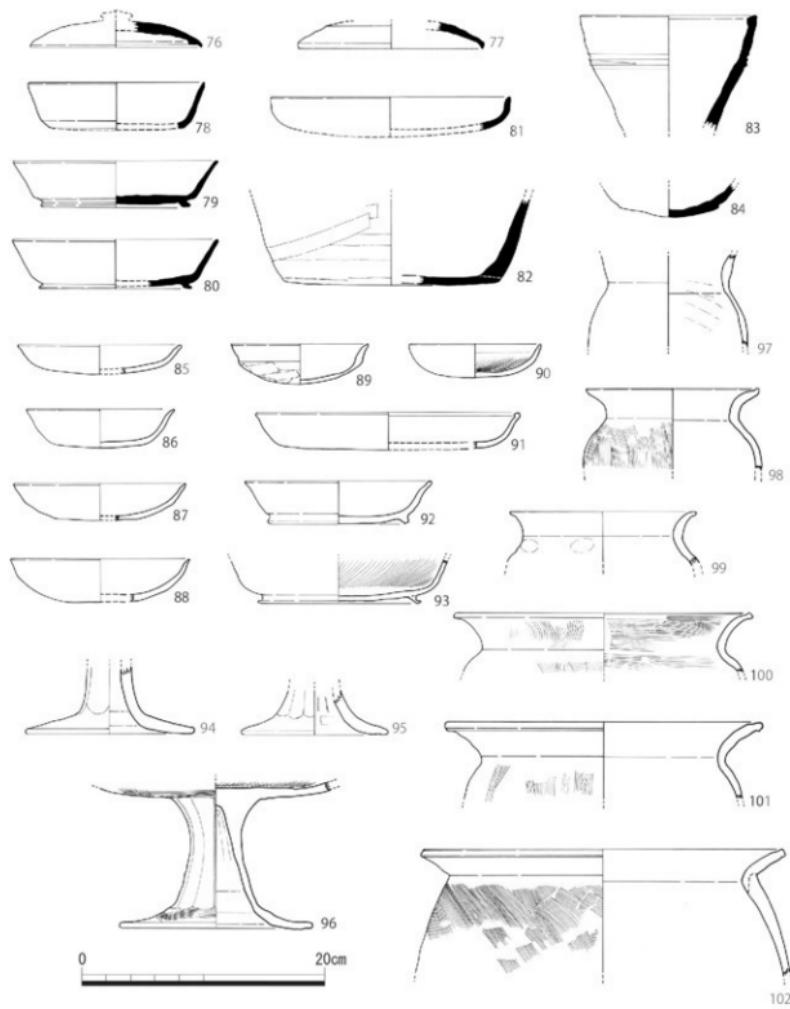


図31 2トレンチ2021SX出土須恵器・土師器 (S = 1/4)

する口縁部の境界に明瞭な稜が存在する。復元口径 11.3 cm、器高 3.3 cm を測る。底部外面はケズリ、他はナデ調整を施す。90 は口径 10.6 cm、器高 2.7 cm を測る。内面下半には放射状の暗文を施し、上半は横方向のナデ調整で仕上げる。底部外面には指頭圧痕がわずかに残る。91 は皿である。復元口径 21.4 cm、器高 3.1 cm を測る。口縁部は直線的に開き、端部は内側に肥厚させる。92 は高台付きの

坏である。復元口径 15.2 cm、器高 3.6 cm を測る。口縁部はわずかに外反する。93 は高台付きの坏ないし鉢である。口縁部は高台のやや外側から立ち上がる。高台は裾が外側に薄く広がる形状である。内面には放射状の暗文を施す。

94～96 は高坏ないし盤の脚部である。94 は面取りを施した細い円筒形の筒部をもつ。95 は裾部がラッパ状に開く。筒部外面には面取りを施し、内面にはしづらの痕が残る。96 は盤であると考えられ、復元底径 15.4 cm、脚部高 10.6 cm を測る。脚部は幅 1.0 cm 前後でほぼ均等に計 11 面となる面取りを行っている。外面にはハケ調整を施し、坏部内面には暗文を施す。97 は壺の頸部である。内面にケズリを施す。98～102 は甕の口縁部～肩部である。98 は復元口径 14.0 cm を測る。口縁部は大きく外反し端部を上方につまみ上げる。99 は復元口径 15.3 cm を測る。ナデ調整を施し、部分的に指頭圧痕が残る。100 は復元口径 24.0 cm を測る。全体にハケ調整を施した後、口縁部外面には横方向のナデ調整を施す。101 は復元口径 25.6 cm を測る。口縁は強く外反し、端部は外側に面をもたせる。体部外面には細かなハケ調整を施す。102 は復元口径 29.2 cm を測る。直線的に外傾する口縁部をもち、端部外側に面をもたせる。細かなハケ調整を施した後、口縁部には横方向のナデ調整を施す。  
2070SK (図 32・33 № 103・104)

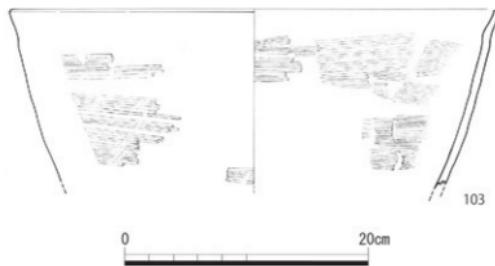


図 32 2 トレンチ 2070SK 出土 繩文土器 (S = 1/4)



図 33 2 トレンチ 2070SK 出土 石器 (S = 1/4)

103 は繩文土器の深鉢である。復元口縁径 39.4 cm、厚さ 0.6 cm を測る。口縁端部は小さな面をもたせる。内外面ともに条痕を施す。時期は繩文時代晚期中頃であると考えられる。

104 はサヌカイトの石核である。重量は 501.1g を測る。

耕作層 (図 34 № 105～113)

耕作層からは須恵器、土師器、瓦器が出土している。そのほとんどが古代の遺構および整地層に由来すると考えられる須恵器と土師器である。

105～110 は須恵器である。105 は蓋で復元口径 14.6 cm を測る。平坦な頂部に回転ヘラケズリを施す。106～109 は高台付きの坏である。106 は底部外面中央が未調整のまま残されている。107 は復元口径 15.4 cm、器高 3.5 cm を測る。内外面に回転ナデ調整を施す。

108は断面方形のやや厚手の高台をもつ。109は復元口径15.2cm、器高4.0cmを測る。110は瓶類の口縁部である。体部との接続部は丁寧なナデ調整が施されている。

111～113は土師器である。111は环である。復元口径10.2cmを測る。口縁端部は小さく外反する。112は広口の壺である。復元口径14.0cmを測る。口縁部と体部の境の稜は不明瞭である。113は甕である。口縁部は直線的に開き、端部を上方につまみ上げる。口縁部は回転ナデ調整、体部外面はハケ調整を施す。

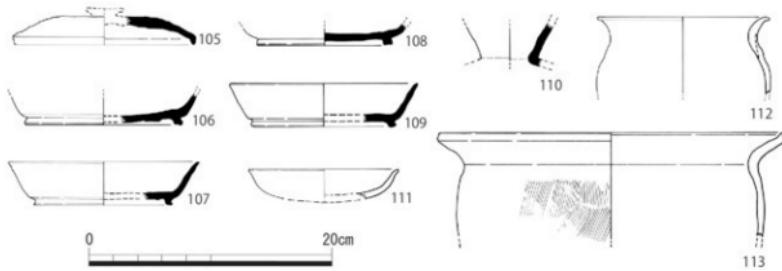


図34 2トレンチ耕作層出土須恵器・土師器 (S = 1/4)

## 第IV章 総括

### 1 トレンチの調査成果

1 トレンチでは中世・藤原京期を中心とする古代の遺構・遺物、縄文時代中期末～晩期の遺物の存在を確認している。

中世については耕作溝と少量の土器が見られ、耕作地としての土地利用が主であったようである。

今回の調査で確認した遺構・遺物の中心は藤原京期である。遺構基盤層であるV層がやや軟弱な地盤であることや遺構の上面が後世の耕作によって削平を受けている点をふまえると、当初は2トレンチ同様に整地層が存在していた可能性もあるが、現在では確認できない。藤原京期の遺構は掘立柱建物・井戸・土坑・溝などがある。調査区南東部一帯の柱穴をのぞくと遺構の重なり合いは少ない。井戸（1044SE）が構築後それほど間を置かずに廃されていることなどともあわせて考えると、藤原京期前後の時期に比較的短期間、宅地として利用された場所であると推測される。

縄文時代の遺物を含む土層（VI層）は、古代の遺構面からは約1.4m下、現地表面からは約2.8m下に存在する。今回の調査では、古代以降の遺構から、この層に由来すると考えられる縄文時代の遺物が出土している。

### 2 トレンチの調査成果

2 トレンチでは中世・藤原京期を中心とする古代、および縄文時代晩期の遺構・遺物の存在を確認している。

中世については耕作溝と少量の土器が見られ、耕作地としての土地利用が主であったようである。

藤原京期の遺構には、掘立柱建物、塀、土坑、溝などがある。遺構の密度は1トレンチよりも密である。また、2トレンチでは藤原京期の整地層を確認している。後世の耕作による削平の影響を考慮する必要はあるが、整地層が施されている範囲は南北溝2022SDよりも西側である。藤原京期の遺構が広がる範囲もこれと同様である。2022SDは藤原京の宅地内における区画溝であった可能性が考えられる。2022SDより西側には多数の柱穴が存在している。調査範囲が限られることもあり、全体像が判別可能な構造物はないが、この地において何處かの建て替えが行われていることが確認できる。

縄文時代晩期の遺構・遺物は少数ではあるが、調査区東端部で確認している。

### 藤原京条坊道路との関わり

第1章第3節で述べたとおり、1トレンチは左京二条七坊西北坪、2トレンチは左京一条六坊東南坪にそれぞれある。2トレンチの南北溝2022SDは東六坊大路との関わりが想定される遺構である。ここでは周辺の調査成果から、東六坊大路および一条大路の詳細な位置についての推定を行い、2022SDについて検討を加える。

これまでに東六坊大路の確実な検出例は知られていないため、調査地周辺における一条大路および

南北道路の検出例などから検討を行う。樅教委 2003－2 次調査では、東四坊大路（中ツ道）と一坊大路の交差点を確認している。交差点中心の座標値は X=165,432.5m・Y=-16,630.0m である。その東側、樅教委 1999－2 次調査では、東五坊大路と一条大路の交差点を確認しており、交差点中心の座標値は X=165,432.4m・Y=16,496.1m である。調査地東方の桜井市教育委員会による黒田池遺跡 1 次調査（大隈地区）では一条大路を検出しており、大路中心の座標値は X=165,429.5m・Y=-15,872.4m である。

これらの数値から、東六坊大路・一条大路交差点の座標は X=165,430 m Y=-16,098m 前後の値であると推測される。一条大路中軸線はちょうど両調査区の中間を通り、各調査区の端とはそれぞれ約 16m の距離が離れている。周辺の調査例で確認している一条大路両側溝芯々間距離は 7.9～8.5 m であり、一条大路の両側溝は調査区外に存在すると考えられる。一方、東六坊大路の中軸線は両調査区間のやや西寄りを通り、1 トレンチ西端とは約 23m、2 トレンチ東端とは約 13m の距離が離れている。2022SD と想定東六坊大路中軸線とでは約 17m の距離がある。一般的な偶数坊大路の規模は側溝芯々間距離約 16m であることから考えると、東六坊大路の西側溝は 1 トレンチ東辺から東に約 5 m の地点周辺を通ると想定される。この場合、2022SD は東六坊大路西側溝から西に約 9 m の地点に位置する溝ということになり、宅地内を区画する溝である可能性が考えられる。

## 黒田池遺跡

黒田池遺跡は縄文時代から古墳時代にかけての集落跡・遺物散布地として記録されている遺跡である。今回の調査では、これらに関わるものとして縄文時代中期末から晩期にかけての遺物の存在を確認している。遺構については、縄文時代以前の堅緻な基盤層が高台として残る 2 トレンチ東端付近で晩期のものをわずかに確認できているのみであるが、過去の調査成果や 1 トレンチでの遺物の出土状況から考えると、縄文時代に調査地の周辺で生活が営まれていたのは確かであると考えられる。

今回の調査では、東隣の黒田池の調査で発見された弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物は出土していない。両調査区において、縄文時代と古代との間のいざれかの時期の河川堆積層（1 トレンチ V 層・2 トレンチ vi 層）を確認している。調査地一帯では自然河道が時期によって位置を変え、それに応じて生活場所を移動させていたのだと考えられる。今後、周辺の地点で調査を行えば、今回の調査で空白であった時期の遺構・遺物が発見される可能性は十分にあると言える。

藤原京期には、このような河川堆積層を基盤としたやや軟弱な土地に整地を行うなどの手を加えつつ宅地として利用していたのである。

## 【参考文献】

- 小島俊次 1965『郷土考古学叢書 奈良県の考古学』吉川弘文館  
奈良文化財研究所編 1998『藤原京研究資料（1998）』奈良文化財研究所  
竹田正則・平岩欣太 2001「大藤原京左京一・二条五坊（樅教委 1999－2 次）」『かしらの歴史をさぐる 8』  
樅原市千塚資料館  
露口真広 2005「藤原京左京一・二条四坊、出合・膳夫遺跡（樅教委 2003－2 次）」『平成 15 年度 樅原市文化財調査年報』樅原市教育委員会

## 報告書抄録

ふりがな	ふじわらきょうあととーさきょういち・にじょうろく・ななばうー、くろだいけいせき							
書名	藤原京跡III—左京一・二条六・七坊一、黒田池遺跡							
調書名								
巻次								
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第7冊							
著作者名	橿原市教育委員会 石坂泰士							
編集機関	橿原市教育委員会事務局 生涯学習部 文化財課							
所在地	〒643-0075 奈良県橿原市小房町11番5号 TEL 0744-22-4001 FAX 0744-24-9707							
発行年月日	西暦 2013年3月26日							
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号					
藤原京跡	奈良県 橿原市 膳夫町・ 出垣内町	29205	14C576	34° 30' 31°	135° 49' 28°	2012/4/16 ~ 2012/6/1	365 m <sup>2</sup>	店舗建設
黒田池遺跡			14B005					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
藤原京跡 黒田池遺跡	都城跡 集落跡	縄文時代 中期末～晚期 藤原京期 中世	土坑、ピット 掘立柱建物、 塙、井戸、土坑、 溝、整地層 耕作溝	土器、石器 須恵器、土師器 土師器、瓦器				
要約	<p>藤原京期の掘立柱建物、塙、井戸、区画溝などの遺構を確認している。北西の調査区(2トレンチ)では、藤原京の整地層の存在も確認。井戸、区画溝からは須恵器、土師器などの遺物が出土している。</p> <p>下層では縄文時代中期末から晩期にかけての遺物が出土している。遺構は、少ながら縄文時代晩期の土坑、ピットを確認している。</p>							



1 トレンチ 上層遺構検出状況（南東から）



1 トレンチ 上層遺構検出状況（南西から）

図版 2

1トレンチ  
調査写真②



1 トレンチ 下層遺構検出状況（南東から）



1 トレンチ 下層遺構検出状況（南西から）



1トレンチ 完掘状況（南東から）

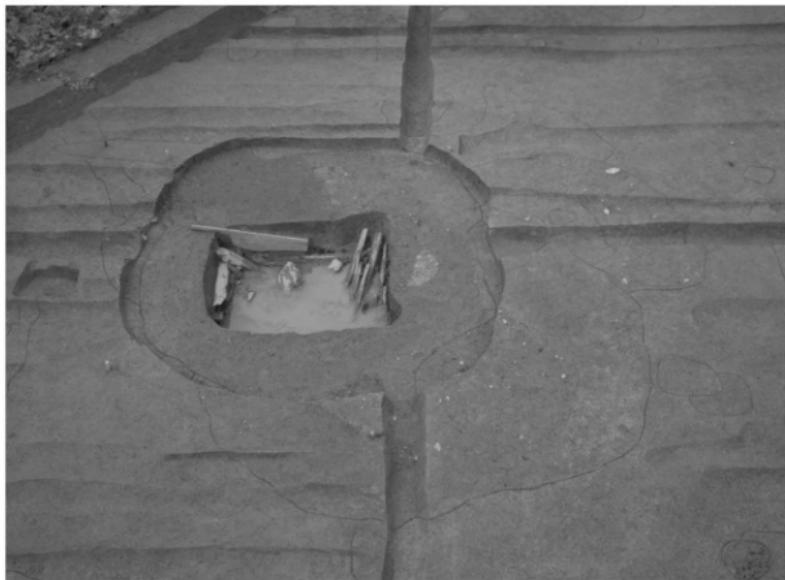


1トレンチ 完掘状況（南西から）

図版 4

1トレンチ

調査写真(4)



1トレンチ 1044SE・1045SD・1047SK 検出状況（南から）



1トレンチ 1044SE 土層断面（北東から）



1トレンチ 1044SE 木材検出状況（北東から）



1トレンチ 1044SE 完掘状況（東から）

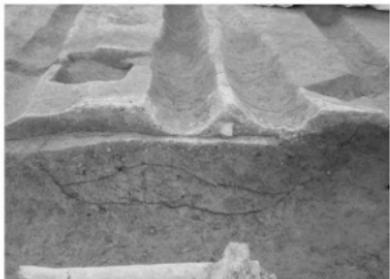
図版 6

1トレンチ

調査写真⑥



1トレンチ 1044SE 土層断面（北東から）



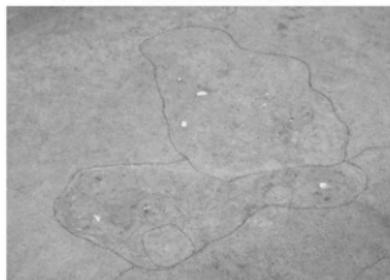
1トレンチ 1047SK 土層断面（東から）



1トレンチ 1045SD 完掘状況（北西から）



1トレンチ 1045SD 土層断面（西から）



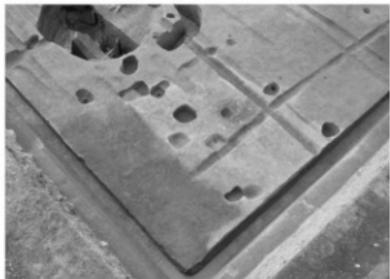
1トレンチ 1099・1100SK 検出状況（北西から）



1トレンチ 1100SK 遺物出土状況（北西から）



1トレンチ 1103SB 検出状況（南東から）



1トレンチ 1103SB 完掘状況（南東から）



2トレンチ 上層遺構検出状況（西から）



2トレンチ 上層遺構検出状況（東から）



2トレンチ 中層遺構検出状況（西から）



2トレンチ 中層遺構検出状況（東から）

図版 8

2トレンチ

調査写真②



2トレンチ 中肩遺構完掘状況（西から）



2 トレンチ 中肩遺構完掘状況（東から）

図版 10

2トレンチ

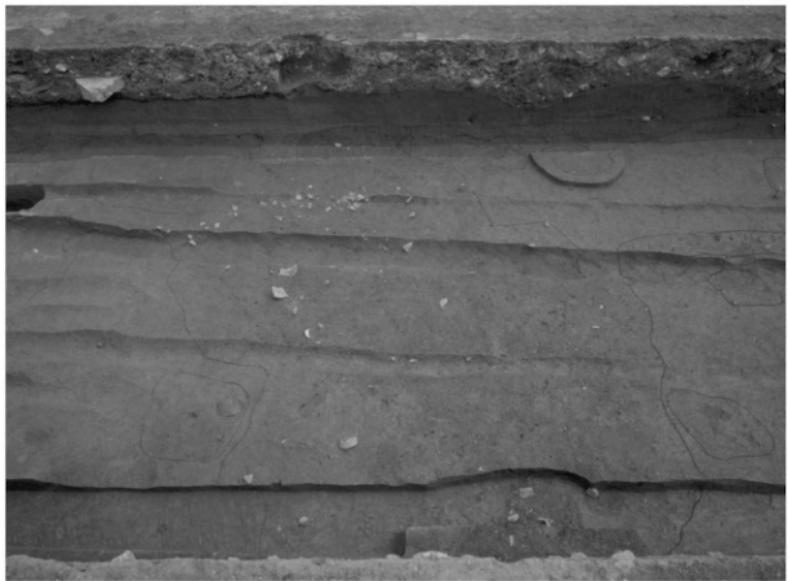
調査写真(4)



2トレンチ 2022SD 検出状況（北から）



2トレンチ 2022SD 完掘状況（北から）



2トレンチ 2021SX 検出状況（北から）



2トレンチ 2021SX 遺物出土状況（北西から）



2トレンチ 2022SD 土層断面（北から）



2トレンチ 2025SP 土層断面（南から）



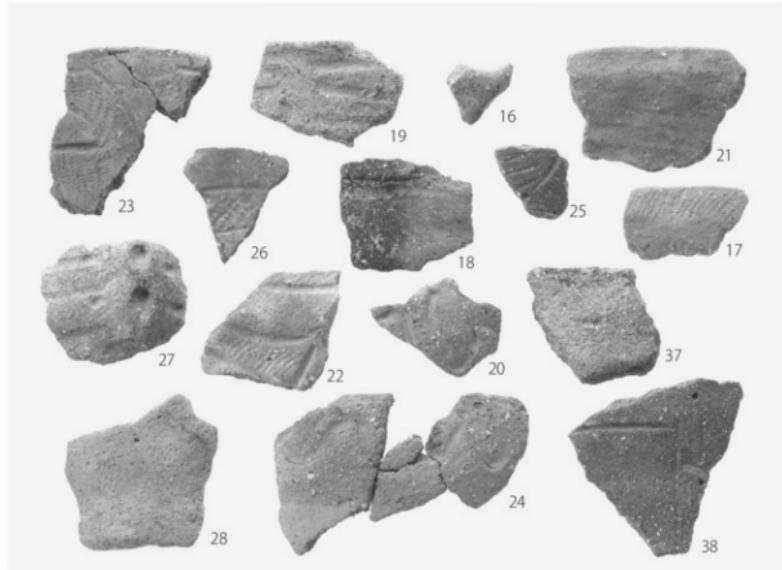
2トレンチ 2070SK 検出状況（北西から）

図版 12

1トレンチ 出土遺物①

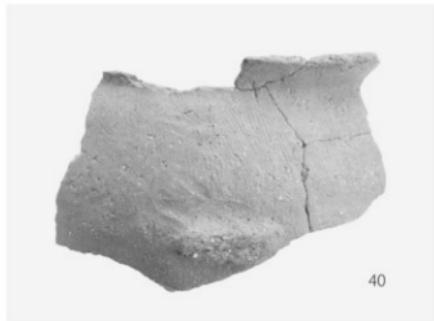


1 トレンチ 1044SE 出土 須恵器・土師器



1 トレンチ 1044SE・1045SD 出土 繩文土器

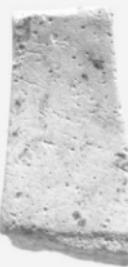
1トレンチ 出土遺物②・2トレンチ 出土遺物①



1 トレンチ 1047SK 出土 土師器



1 トレンチ 1044SE 出土 須恵器



5

71

1 トレンチ 1100SK 出土 土師器



51



62



52



63



53



55



66

2 トレンチ 2022SD 出土 須恵器・土師器

図版 14

2トレンチ 出土遺物②



80



89



90



88



96



92

2トレンチ 2021SX 出土 須恵器・土師器

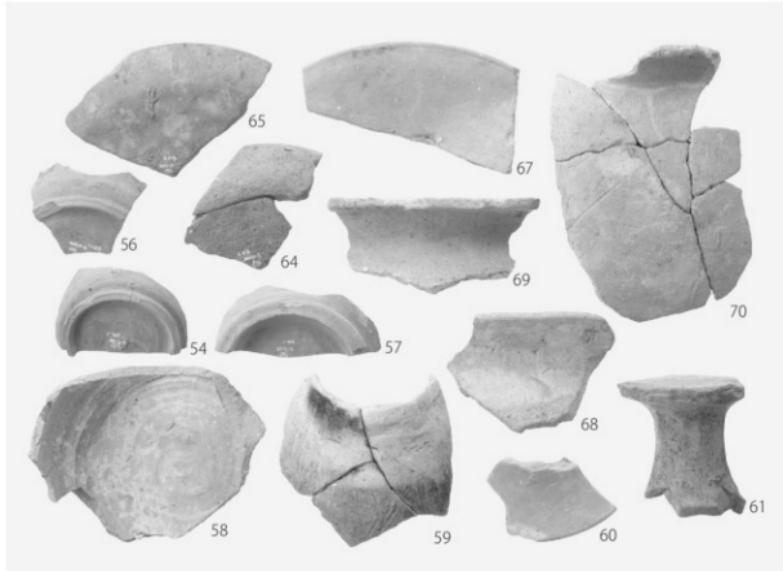


103

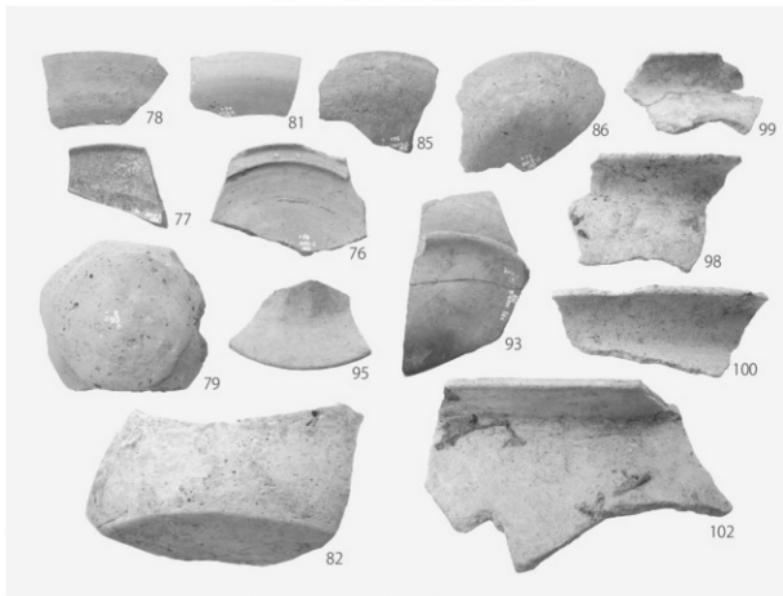


104

2トレンチ 2070SK 出土 純文土器・石器



2トレンチ 2022SD 出土 須恵器・土師器



2トレンチ 2021SX 出土 須恵器・土師器

橿原市埋蔵文化財調査報告 第7冊

藤原京跡Ⅲ、黒田池遺跡

—左京一・二条六・七坊—

発行年月日 平成25(2013)年3月26日

編集・発行 橿原市教育委員会

印 刷 (株)明新社

奈良県奈良市南京終町3-464